



Title	近現代漢語接尾辞「者」の成立と展開
Author(s)	朱, 曉平
Citation	大阪大学, 2018, 修士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90734
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

本論文に関する説明

本論文は、大阪大学の機関リポジトリOUKAでまとめて公開している日中語彙交流に関する以下の修士論文（文学研究科 文化表現論専攻 日本語学専門分野）8編の1つです。

- 朱 曉平：近現代漢語接尾辞「者」の成立と展開（2018年）
孫 曉：「経験」の展開—日中両語間の相互影響と語義的変容—（2019年）
沙 広聡：接尾辞「性」の歴史—日中両語間の相互影響—（2020年）
崔 蕭寒：「摩擦」の語史—日中両語の相互影響—（2021年）
袁 書予：「分析」の成立と変化（2022年）
馮 玥：「反応」の語誌（2022年）
張 静怡：「中和」の成立と変遷（2023年）
張 梓旋：「発明」の成立と展開（2023年）

いずれも独自の発見や考察を多く含む力作で、未完成の要素もあるにせよ広く読んでいただけるよう各著者の了解を得て公開することにしました。

論文への言及時には、「大阪大学大学院文学研究科修士論文」とお書き添えいただければ幸いです。「大学院」の3字はなくても差し支えありません。

なお、朱曉平さんと崔蕭寒さんの修士論文については、主要部分を抜粋、改稿した論文が『或問』第33号（2018年）、第39号（2021年）にそれぞれ掲載されています。また、沙広聡さんの関連する論文が『東アジア国際言語研究』第2号（2021年）と『阪大日本語研究』34（2022年）に掲載されています。

田野村忠温
2023年3月

平成 29(2017)年度 修士学位申請論文

近現代漢語接尾辞「者」の成立と展開

大阪大学大学院文学研究科 博士前期課程

文化表現論専攻 日本語学専門分野

朱 暁平

要旨

本稿は、先行研究に対する疑問点をきっかけに、「者」という漢語接尾辞を研究対象にして、幕末・明治初期においてどのように展開したのかを、資料の調査を通じて明らかにしようとするものである。

本稿では、まず第2章で、漢語接尾辞「者」に関する先行研究を整理し、その問題点を分析する。そして問題意識をもとに、本稿の研究目的を提示する。簡潔に以下の通りである。

- (1) 「者」はなぜ英和辞書や翻訳書に多く用いられたのかを明らかにする。
- (2) 「者」はどのように展開され、普及したのかを明らかにする。
- (3) 日中間の語彙交渉の面において、日本語の「者」の使用は中国語に影響を与えたのかを考察する。

第3章では、研究目的の(1)によって、なぜ英和辞書や翻訳書において「者」が多用されたのかについて、主に蘭和辞書や英和辞書における「者」の使用状況を調べてみた。その結果、従来の論である“中国後期の洋学資料から大きな影響を受けた”という点が不適切であり、“日本の蘭和辞書からの影響”であることを明らかにした。

第4章では、研究目的の(2)として、漢語接尾辞「者」の一般化について、主に新聞雑誌を通じてその使用状況を調べてみた。用例の観察に基づいて、明治期に入って「者」の使用が増えはじめ、明治20年代になってから、使用量がいつそう増えるようになったことが分かった。また本稿は、従来の研究では考察対象としなかった「1字+者」に注目し、幕末・明治期において「記者」「著者」のような語も現れたことを明らかにした。

第5章では、研究目的の(3)について、日本語の影響を受ける前に、中国宣教師、または中国人が、翻訳する際既に「者」を用いたことがある、ということを明らかにした。そのうえで、本稿は在日留学生によって刊行された新聞雑誌や、中国において権威のある雑誌を通じて、日本語としての「者」の使用例を観察してみた。

第6章では、先行研究による問題点を提示しながら、資料の考察を通じて、明らかにしたことをまとめてみた。また、本稿において不十分なところを分析したうえで、今後の課題を示した。

本研究は、「者」を日中両語の語彙交流の一環として、その歴史を解明することに、貢献するものであると考える。

目次

1.	はじめに	1
2.	先行研究とその検討.....	1
2.1	劉(1989)について	2
2.2	李(2000)について	2
2.3	李(2005)について	3
2.4	中国語への影響について——沈(1994)、劉(2009)	4
2.5	諸説の検討	5
3.	翻訳上に用いられた漢語接尾辞「者」の由来.....	8
3.1	本木正栄ほか編『諸厄利亜語林大成』(1814(文化 11)年).....	8
3.2	桂川甫周編『和蘭字彙』(1855(安政 2)年).....	9
3.3	堀達之助ほか編『英和对訳袖珍辞書』(1862(文久 2)年).....	10
3.4	中村正直訳『西国立志編』(1871(明治 4)年)における「者」の訳語.....	12
3.5	総括と考察	17
4.	近現代漢語接尾辞「者」の展開過程.....	18
4.1	初期的な新聞雑誌において	18
4.2	『明六雑誌』において.....	19
4.3	『東洋学芸雑誌』において.....	21
4.4	『国民之友』において.....	23
4.5	新聞雑誌以外	27
4.6	総括と考察	28
5.	中国語への影響	29
5.1	日本語の影響を受けた以前	29
5.2	日本語による影響.....	31
5.3	総括と考察	34
6.	おわりに	35
	参考文献	36
	調査資料	37

1. はじめに

「者」という語には、中国語において古来より文法上、また語彙上でも多様な意味・用法があった。この「者」という語は古くから日本語に借用され、用いられていたのである。一方、現在日本語において「者」は、主に「ヒト」を表す接尾辞として用いられている。法律分野においては、「行為者」「当事者」「義務者」「被害者」など多くの語が現れている。そして野球界では、「打者」「走者」のような語がある。さらには一般社会や日常生活でも、「記者」「著者」「消費者」「学習者」「愛好者」などの語が多く見られる。

実は、日本語におけるこの「ヒト」を表す漢語接尾辞「者」は、古い時代から多用されており、長い歴史を持っている。イエズス会の宣教師によって編纂された『日葡辞書』¹(1603～1604(慶長 8～9)年)には、「Annaixa(案内者)」「Gacumonja(学問者)」「Gonja(権者)」「Indoxa(引導者)」「Sacuxa(作者)」「Xinja(信者)」「Xuguiōja(修行者)」²など、多くの語が見られており、当時既に用いられていたことが分かる。

しかし、「者」は現代語において、特定分野の領域に限らず、一般社会や日常生活へ深く浸透し、重要な一語になっていることは、幕末・明治初期の翻訳舞台での登場と大きな関わりを持っている。だからこそ、従来の研究者に大きく注目をされている。

この漢語接尾辞「者」は、幕末・明治初期の翻訳舞台ではどのようにして普及したのかについていくつかの論がある。本稿はそれらに対する疑問を出発点とし、資料の調査を通じて「者」の展開過程を明らかにしようとするものである。

2. 先行研究とその検討

「者」の語史に関わる先行研究の中では、劉(1989)、李(2000)、李(2005)の論を検討すべきだと判断する。「者」の多用に関して、ほとんど一致した見解を結論としているが、それぞれ違った英和辞書を対象にして考察を行った。

また、中国語への影響について、劉(2009)と沈(1994)の論を検討したい。どちらも日本語からの影響があると論じているが、沈は“中国人独自の努力がある”という見解もした。

¹ 『日葡辞書』は、室町時代(1338～1573)の日本語を反映している重要な資料である。本辞書は、日本語をポルトガル語で解説した辞書であり、日本語の単語をローマ字で表記している。本稿は、森田武編『邦訳日葡辞書索引』(岩波書店、1989年)を参考にして、ローマ字の表記と対応する漢語の表記を示した。

² 『日葡辞書』では、“ō”が「長音」を表す。

2.1 劉(1989)について

劉(1989)は最初に漢語接尾辞「者」の語史を論じる最も詳しい論文である。劉(1989)は主に幕末・明治初期の英和辞書、翻訳書を対象とし、明治期以降「者」を用いた語の数が急速に増えていたことを明らかにしている。劉は「者」が多用される理由について、“中国後期の洋学資料³からの影響”、“近代的な職業の種類の増加”、“2 字以上の漢語の増加”の3つを挙げている。

中国後期の洋学資料からの影響を受けていることを証明するために、劉は中国のドイツ人宣教師ヴィルヘルム・ロプシャイト(Wilhelm ^{ロプシャイト}Lobscheid、1822～1893、中国名羅存徳)による『英華字典』(*English and Chinese Dictionary With the Punt⁴ and Mandarin Pronunciation*、1866～1869(同治 5～8)年)における「者」の中国語の項目を、中村正直^{まさなお}訳『西国立志編』(Samuel Smiles 原著 *Self-Help*、1871(明治 4)年)における日本語の用例、柴田昌吉^{まさきち}・子安峻^{たかし}編『附音插图英和字彙』(初版、1873(明治 6)年)における日本語の項目と比較した。

考察した結果、一致しているものが多いことから、『西国立志編』の訳者である中村正直は『英華字典』の訳語を参照したうえで作ったものであることと、『附音插图英和字彙』は『英華字典』から非常に大きな影響を受けたと述べている。

また、劉は『附音插图英和字彙』を対象にし、「者」より構成された複合語と英語の原語と比較することを通じて、幕末・明治初期の英和辞書や、翻訳書に現れた「者」によって構成された複合語は英語から翻訳されたものが多くあって、そのような複合語にある「者」は基本的に英語の“-er”、“-or”、“-ist”、“-ian”など、「ヒト」を表す接辞と対応していることを示している。

なぜそのような対応関係が成り立つのかについて、劉は、英語の“-er”、“-or”、“-ist”、“-ian”の諸接辞が主として結合形式である、造語力が強い、意味が形式化している、3つの特徴があると説明したうえで、漢語系諸接辞の中で「者」の持つ性格がこれらの英語の接辞ともっとも近いからであると結論付けている。

2.2 李(2000)について

李(2000)は J. C ヘボン(James Curtis Hepburn、1815～1911)『和英語林集成』における「英和の部」に対して、各版(1867(慶応 3)年～)における「ヒト」を表す漢語接尾辞について考

³ 中国において、カトリック宣教師による 16 世紀から 17 世紀 20 年代にかけての布教時期を“前期”、プロテスタント宣教師による 19 世初頭からの布教時期を“後期”と 2 つに分けており、ここの“中国後期の洋学資料”はプロテスタント宣教師による著書を指す。

⁴ Punt⁴ は広東語読みであり、その意は広東を表す「本地」である。書名中の“the Punt⁴ and Mandarin Pronunciation”は、本辞書における見出しと例文を「広東語および官話の発音」で示すことを指す。

察した。李は「ヒト」を表す漢語接尾辞の中、最も多く見られる「者」と「人」の両者に重点を置いて、重版ごとにどのような訳語の中に用いられるかを調べた。その上で、主に第3版を対象として、原語との関わりの上でどのような特徴を見せているかを中心に分析を行った。

漢語接尾辞「者」について、李は『英華字典』『附音插图英和字彙』『和英語林集成』（初版、1867(慶応3)年)を用いて、英単語の“bachelor”、“backslider”、“bidder”に対して『英華字典』と『英和字彙』は「者」をもって同様または類似な語を訳しているが、『和英語林集成』は「者」を使わず「手」「人」を用いて異なる語を訳していることを明示している。これによって、李は『英和字彙』が近世後期の中国語訳の「者」を直接に受容しているのに対して、『和英語林集成』直接的な影響は認めにくいという結論を出している。

それに、李は「者」の付いた漢語をむやみに採り入れず、和語をもって訳しているため、『和英語林集成』初版においては「2字漢語+者」の語の数は「案内者」「鑑定者」「人相者」「理学者」「予言者」「記録者」「偽善者」「神学者」の8語しかない。しかし、第3版になると、「英和の部」の「2字漢語+者」の用例が著しく増加し、その中で再版において増補された訳語の「天学者」「星学者」「地理者」「博学者」「発明者」「鉱物学者」も一部見られるが、その多くは第3版に来て増補された訳語であると述べている。

李は、第3版による「者」の訳語が多く増補された原因を探るため、第3版と第2版との訳語を比較した。第3版において、例えば「patriot-ism 愛国一心」「patriot-ic 愛国一の」「patri-ot 愛国一者」のように、原語の見出しが“-ism”、“-ize”、“-er”などの接辞による名詞形、形容詞形、動詞形といった一連のパラダイムを構成している場合、日本語の訳語も原語の概念に対応する2字漢語を軸としたパラダイムを作る、という傾向が見られると主張している。このような新しい日本語のパラダイムの中で、原語における“-er”のような接辞に対して「者」をもって意識的に当てたようなところがあると述べている。

このように、なぜ第3版では「2字漢語+者」が急速に増えていたのかについて、李は2つの理由でまとめた。1つは、明治期に入ってから、2字以上の漢語が急増したためとしている。もう1つは、語基を軸とした英語のパラダイムに合わせるために、「者」を“-er”、“-or”、“-ist”、“-ian”など「ヒト」を表す接辞に対応して、多用するようになったことが考えられると結論づけている。

2.3 李(2005)について

李(2005)は、柴田昌吉・子安峻によって編纂された初版の『附音插图英和字彙』と再版の『増補訂正英和字彙』(1882(明治15)年)を考察対象として、その辞書における「ヒト」を表す造語成分の中、最も多く使われた「者」に注目した。李は再版を初版と比較することによって、再版において造語成分の「者」が2字漢語と結合し、大量に増補された理由につい

て分析を試みた。

李は、初版に見られず再版だけに見られる語に対して、見出しに対応する訳語として造語或いは中国語からの借用などにより、新たに増補された可能性が高いと述べて、中国語からの借用があったと示している。それに、李は再版には初版の訳語とは関連性がなく新たに増補された語に対して、その背景には新しい職種の誕生や訳語の多様化の追及などがあると述べている。

また、李は再版では初版の単語訳を修正したと見られる場合には、2つの特徴があるとした。1つは1字漢語に下接する語から2字漢語に下接する語に交替する場合がある、ということである。例えば、“arbiter”に対して、「判者」から「判訟者」へ修正した、という例がある。

もう1つは、初版における「人」を含む訳語からの交替が多いことである。例えば、“election”に対して、「被選人」から「被選者」へ交替した。李は、初版に見られる「人」と「者」の訳語のゆれを再版では「者」に統一している、ということから見れば、再版の刊行当時、造語成分の使用において「人」に代わって「者」が優勢になりつつあったことを示していると述べている。

また、造語成分「者」が増加した理由について、李は劉(1989)と李(2000)の観点、つまり“近世後期中国の英華字典・洋学書の影響”、“近代的な職業の種類増加”、“2字以上の漢語語基の増加”を認めただけで、「者」を「人」と比較して考察を行った結果、“「者」が「人」より、比較的新しい語感を伴うことと、結合する語基との関係が場合によって「ニン」「ジン」と読み分けにする必要がある「人」と比べて自由であること”をもう1つの理由として加えている。

2.4 中国語への影響について——沈(1994)、劉(2009)

沈(1994)は、北京師範学院中文系漢語教研組が編著した『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』(商務印書館、1959年、以下『五四』と略す)を取り上げて、そこにある「者」に関する記述を、「者」を含むとする中国語におけるの接辞化の歩みは、確かに日本の訳語の流入によって加速されたが、そこにはまだ“中国人独自の努力がある”——と解釈している。

劉(2009)は劉(1989)を元にして、近代中国語への影響について考察を加えて再版にしたものである。近代中国語への影響について、劉は、中国の言語学者である王力が書いた『中国語法理論』(商務印書館、1944年)を取り上げている。劉は、本書に対して、「者」のことを“新興の欧化記号”の1つであると示したが、日本語との関係について触れていないと述べている。

また、劉も沈が扱った『五四』を取り上げて、「者」を含む多くの造語成分の接辞化が日本の訳語からの影響を受けていると指摘したが、具体的にどのような影響を受けているの

かを究めなかったと論じている。

したがって、劉は1900(明治33)年に創刊された、中国人留学生の最初の雑誌『訳書彙編』と、梁啓超が書いた『飲氷室合集』⁵における「者」の用例を考察した。考察した結果、『訳書彙編』『飲氷室合集』に使われた「者」が構成した語のほとんどは日本語から直接借用したものであると結論している。

さらに、劉は、日本で長年留学したことのある、作家の魯迅^{ろじん}の作品における「者」の用例を加えて、日本語から借用した「者」が構成した語は、単に借用にとどまらず、中国語の「者」の接辞化をも促進したと述べている。

2.5 諸説の検討

上述、日本語における漢語接尾辞「者」の語史と関わる劉(1989)、李(2000)、李(2005)の論に対して、共通している問題点が3つある。

第1に、翻訳における漢語接尾辞「者」について、英語という言葉に限って考察することは不十分である。

劉が取り上げた堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』(1862(文久2)年)を取り上げて説明する。劉の考察によれば、『英和对訳袖珍辞書』において、漢語接尾辞「者」が多用されていることが分かった。

しかし、『英和对訳袖珍辞書』は、蘭学者が英蘭辞書を利用して編纂したものであることが既に明らかにされている(豊田(1941);永嶋(1968))。したがって、『英和对訳袖珍辞書』における「者」の多用を研究するには、先ず底本にした蘭和辞書を確認する必要がある。つまり、従来の研究が対象としなかった蘭和辞書への考察は、実は「者」の展開状況を明らかにするために非常に重要であると考えられる。

この問題に関わって、先行研究でよく論じてきた漢語接尾辞「者」は基本的に英語の“-er”、“-or”、“-ist”、“-ian”など、「ヒト」を表す諸接辞と対応している論点も、検討する余地が生じる。

第2に、漢語接尾辞「者」の多用は近世中国の英華字典や洋学書から大きな影響を受けたことは再検討すべきである。

近世中国の英華字典や洋学書は日本における英語の訳語の創出に多大な役割を果たしたことが既に明らかにされている(森岡(1965);森岡・伊藤(1966))。しかし、劉の考察に疑問を感じたことをきっかけに、初めて漢語接尾辞「者」の多用という点においても、近世中国

⁵ 梁啓超(1873~1929)は、戊戌^{ぼじゅつ}の変法(百日維新)の領袖の一人である。戊戌の変法が失敗した後、日本へ亡命したことがある。『飲氷室合集』は梁啓超の著作を収めたもので、“飲氷室”は梁啓超の書齋名を指す。

の英華字典や洋学書から大きな影響を受けたのかと考えるようになった。

劉は、中国後期の洋学資料からの影響があることを証明するには、『西国立志編』における日本語の用例と、『英華字典』における「者」の中国語の用例と比べて、一致しているものが多いことから、『西国立志編』の訳者である中村正直は『英華字典』の訳語を参照したうえで造ったものであると述べている。

しかし、劉の分析方法や結論について、問題点がある。(1)それぞれ20例の用例のうち、『西国立志編』による用例は全て「者」が付くのに対し、『英華字典』では、「者」が付く用例13例のほかに、「禽学博士」「曆家」「博金石之士」「^{ていとうろう}剃頭佬」「地学博士」「首領」「上帝教之師」のような「者」以外の語が付く用例が7例もある。(2)一致している用例は「立法者」⁶「包弁者」の僅か2例のみである。

もし『西国立志編』が『英華字典』の訳語を参考に造ったものであれば、『英華字典』の訳語が「者」で終わることが前提であろうと考え、この7例の引用自体は不適切である。それに、一致している用例は「立法者」「包弁者」の僅か2例のみであるにも関わらず、劉による共通している訳語が多いという結論は成り立ちにくいのである。

また、劉は『英華字典』における「者」の用例を比較するには、『西国立志編』のほか、『附音插图英和字彙』も取り上げている。『西国立志編』の場合と同様に、『附音插图英和字彙』による用例は全て「者」が付くのに対し、『英華字典』にはそうになっていない用例がある。それに、24例の中、一致している用例は9例しかない。

このように、「者」は古来中国にもあり、英華字典や洋学書においても確かに用いられており、容易に中国からの影響であると考えられる。しかし、「者」が用いられた多くの語の中で、数例しか一致していないのにも関わらず、この数例だけをもって影響が大きいという結論は説得力が低い。それに、第1で説明したことも含めて、蘭学辞書による影響をまず考察する必要がある。

第3に、“2字漢語の増加”は「者」の多用とは直接な関係があるのかということである。

劉は、“2字以上の漢語語基の増加”という理由を説明するには、1字が複雑な新概念を表すことができず、2字以上の漢語語基が大量に増加した。これによって、「者」がそれに下接して、たえず新しい漢語を構成することが可能になったと述べており、辞書による翻訳方法の変化については明確に論じていない。

これに対して、李(2000)は辞書での翻訳方法の変化について言及した。具体的に言えば、『和英語林集成』が再版までは句をもって所謂「注釈法」による翻訳方法であったが、再版になって2字以上の漢語の急増によって、「単語対単語訳」が可能になったと述べている。

⁶ 漢語の熟語集として最も権威ある書物である『佩文韻府』では、「立法者」という語が現れている。つまり「立法者」は中国古来の言葉であることを示している。これによれば、日本人が古来この語を借用した可能性があると考えられ、必ずしも『英華字典』の「立法者」の用例を参照にしたとは限らない。

しかし、李は「者」が多用された理由として、劉の結論と同じように、“2 字漢語の増加”とまとめている。

極端な例を挙げて説明すれば、仮に西洋の新しい概念を 1 字漢語でうまく訳すことができるのであれば、それらの 1 字漢語に「者」を下接して、新しい訳語を構成することができるのである。それに、たとえ 2 字漢語が増加しても、この 2 字漢語と「者」の結合方法は、「2 字漢語＋者」という方法に従わず、例えば、“*deviser*”に対して「発明者」と訳さず、「発明した者」と訳しても特段の問題がない。果たして、根本的な理由は、“2 字漢語の増加”ではなく、“辞書による翻訳方法の変化が生じた”ためであると理解している。

つまり、従来、英語のある語を訳す時、意味を伝えることを重視し、句をもってその語の意味を解釈するようにしたことがあり、所謂「注釈法」による翻訳方法である。しかし、膨大な新語が次々と来て、当時の洋学者は一日でも早く新しい概念を吸収して実際に使うようになるため、「注釈法」による効率が悪い翻訳方法に満足せず、新しい語を創出することによって、「単語対単語訳」を実現しようとしている。これは、言語の経済性も反映すると考えられる。

したがって、「者」の多用の根本的な原因は“辞書による翻訳方法の変化”であり、“2 字漢語の増加”という記述は不十分であることを指摘したい。

また、中国語への影響について、沈(1994)と劉(2009)は、どちらも日本語の接尾辞「者」の使用が中国語の「者」の接辞化に影響を与えたと述べているが、沈は、そこにはまだ“中国人独自の努力がある”と述べている。しかし、いったいどのような努力があったのか、言及していない。

先行研究に対する検討によって、本稿は考察を通じて、以下の 3 点を明らかにしようとする。

- (1) 「者」は何故英和辞書や翻訳書に多く用いられたのかを明らかにする。
- (2) 「者」はどのように展開され、普及したのかを明らかにする。
- (3) 日中間の語彙交渉の面において、日本語の「者」の使用は中国語に影響を与えたのかを考察する。

扱う対象について、先ず本稿は資料における「者」の用例の全てを問題として扱わず、「ヒト」を表す「者」の用例を対象にして考察するということである。それに、漢語接尾辞「者」が付く語の中、『国語大辞典』第 2 版第 3 巻(小学館、2001 年)による記述を基準として、「不作家」「馬鹿者」のような「者」を「モノ」と呼ぶ語を対象外とする。

また、先行研究によれば、2 字、または 2 字以上の漢語に下接する語を対象にして、近現代漢語接尾辞「者」の展開過程を考察してきた。しかし、ここまで無視された 1 字漢語に下

接する語は現代語においても不可欠な語となっている。本稿は造語の創出に注目するという点から、1字漢語に下接する語を扱うことにする。本稿では用例の引用に際しては、日本語、中国語共に原則として現代日本の漢字字体で表記する。

3. 翻訳上に用いられた漢語接尾辞「者」の由来

本稿は劉(1989)が蘭和辞書を考察しなかったことと、『西国立志編』における「者」の用例の出所に対する誤判断を考慮したうえで、本木正栄ほか編『^{まさひで}諸厄利亜語林大成』(1814(文化11)年)、桂川^{ほしゅう}甫^{おらんだ}周編『和蘭字彙』(1855(安政2)年)、『英和对訳袖珍辞書』また『西国立志編』を対象として、「者」の用例を確認する。

3.1 本木正栄ほか編『諸厄利亜語林大成』(1814(文化11)年)

江戸時代後期のオランダ通詞である本木正栄は幕命でオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ(Hendrik Doeff)やヤン・コック・ブロンホフ(Jan Cock Blomhoff)に英語を学んで、1814(文化11)年に、日本で最初の英和辞書『諸厄利亜語林大成』を編纂した。その中で、「患者」「作者」「術者」「著作者」「兌銀者」のような「者」が付く語がいくつか現れる。

『諸厄利亜語林大成』における多数の項目の中、「bank 兌銀舗」、「banker 兌銀者」という項目に注目したい。以下のように引用する(左から英語、オランダ語(筆者による解説)、日本語の順)。

^{ベント}bank. ^{リョウガエザ}wisselbank.(外貨両替) 兌銀舗

^{ベント}banker. ^{リョウガエスルヒト}bankier.(銀行家) 兌銀者⁷

調査の限りでは、「兌銀舗」という語は従来日本語にあった語に対して、「兌銀者」は恐らく編者が“banker”を訳すために作った語である。このように判断するには、2つの根拠がある。

第1に、日本側の資料の調査を通じて、「兌銀者」という語の用例を見つけず、この語は

⁷ 原文では、「兌銀舗」の振り仮名は「リヤウガヘザ」で、「兌銀者」の振り仮名は「リヤウガヘスルヒト」である。ここの「リヤウガヘザ」と「リヤウガヘスルヒト」は漢字表記の読みというよりも、その意味を示すものである。『^{コシラヘタルモノ}諸厄利亜語林大成』におけるほかの項目——「^{シゴト}操作スル」(to labour)、「^{シゴト}為業者」(workman)、「^{シゴト}作物又作事」(workmanship)——によれば、本辞書の訳語の振り仮名は必ずしも漢字表記の読みを表していたわけではないことが分かる。それに、本辞書の「凡例」にも「(前略)訳字は必漢字を以てし、而して其際間々或は俚俗の語を下に記して、其面目を失はざらしめんとす」という説明がある。

以前にはなかった語、という可能性が大きい。「兌銀者」に対して、「兌銀舗」は1709～1738(宝永6～元文3)年の徳川実紀を収めた『続国史大系 第13巻』(経済雑誌社、1904年)という資料の中に多く見られる。それに、『日本国語大辞典』には、「兌銀舗」の項目もある。用例と辞書による記述を引用するほどの意味もないため省くことにする。

第2は、中国側の資料を調べてみたところ、「兌銀舗」と「兌銀者」のどちらも中国語からの借用だと考えにくいからである。「兌銀舗」については、「銀舗」「兌換舗」「傾銀舗」のような似た表現があるが、同じ表現はなかった。「兌銀者」について1例のみあった。以下のように引用する。

蓋兌銀之人本恐錢重難携,每以用票為便,而奸商即因以為利。(中略)兌銀者持票控追,終成無著。此奸商以票騙銀之積弊也。(お金に交換する人は、そもそもお金が重いために、持って歩くことを怖がり、便利のためいつもチケットに交換しているが、奸商はこれを利用して、利益を獲得する。(中略)お金を交換しにきた人はチケットを持って追いかけても見つからず、これは奸商がチケットでお金を騙すことは多年にわたる弊害となる。)

(林則徐「錢票無甚閼碍宜重禁吃煙以杜弊源片」王延熙・王樹敏編『皇朝道咸同光奏議』1838(道光18)年)

この文において、本来「兌銀之人」のような単語の結びつきとして表すべきところを、臨時に「兌銀者」の1つの複合語にまとめるようになった(石井(2014))。したがって、「兌銀者」は定着した1語というよりも、臨時に作られた複合語である。

このように、「兌銀者」の1語を通じて、日本の最初の英和辞書『諳厄利亜語林大成』からも、既に「者」を接尾辞として用いて新しい語を創出するようにしていた、ということを推定できる。

3.2 桂川甫周編『和蘭字彙』(1855(安政2)年)

1816(文化13)年に、長崎出島のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフ(Hendrik Doeff)が、長崎通詞らと協力して蘭和辞典『道訳法兒馬』(Doeff-Halma Dictionary、通称「長崎ハルマ」)を編纂した。40年後の1855(安政2)年に、桂川家第7代桂川甫周(1826～1881)がこれを改訂し、『和蘭字彙』という題で出版した。

『和蘭字彙』において「者」を用いた項目の中には、「記者」「窮理学者」「芸術者」「神学者」「創造者」「著述者」「天文者」「文学者」のような近代的な概念を表す用例が少なくない。以下、項目の一部を取り上げる(項目の順番は辞書によるもの、括弧内には筆者による解釈)。

bookschrijver, z.m. schrijver.(本の作家、男性名詞、ライター) 記者又著述者

godgeleerdheid, z.v. kennis van god.(神学、女性名詞、神の知識) 神学又神道

godgeleerde, z.m. godsgeleerde.(神学者、男性名詞、神学者) 神学者

letterkonst, z.v. letterkunst, spraakkunst. (文学芸術、女性名詞、文芸、スピーチアート) 文学
letterkunstenaar, z.m. spraakkundige. (文学芸術家、男性名詞、スピーカー) 文学者

maker ,maaker. z.m. schepper, werkmeester. (メーカー、メーカー、男性名詞、創造者、ワークマスター)
創造者 又作ル人
meester. konstenaar, hetzij schilder, beeldhouwer, enz. (マスター、アーティスト、画家、彫刻家など)
芸術者 画師仏師其外右ノ類ノ細工人ヲ云

natuurkennis, z.r. natuurkunde. (自然知識、女性名詞、物理) 窮理学
natuurkenner, z.m. natuurkundige. (自然主義者、男性名詞、物理学者) 窮理学者

planeetkenner, z.m. sterrenkijker, sterrenkundige. (惑星の愛好家、男性名詞、天文家、天文家) 天文者

3.3 堀達之助ほか編『英和对訳袖珍辞書』(1862(文久2)年)

『英和对訳袖珍辞書』は本格的な英和辞典として、日本の英語辞書史上で果たした役割は極めて大きなものであった。『英和对訳袖珍辞書』は、英蘭辞書である *A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages*. (H.Picard, 第2版, 1857(安政4)年、以下 *Picard Dictionary* と略す) を底本とし、そのオランダ語部分を和訳する方法によって編集されたものである(杉本(1999))。

『英和对訳袖珍辞書』は『和蘭字彙』を参照にして訳語をそのまま用いた場合が少なくない。以下、『和蘭字彙』、『英和对訳袖珍辞書』の底本である *Picard Dictionary*、『英和对訳袖珍辞書』の3つの辞書を用いて、共通する項目の一部を引用する(括弧内に筆者による解釈)。

aankomeling, z.m. env. jongeling of meisje. (初心者、男性名詞、また、青少年) ^{オイタツモノ}成長者⁸
(『和蘭字彙』)
Newcomer, s. aankomeling, m. (初心者、男性名詞) (*Picard Dictionary*)
Newcomer, s. ^{ライタツモノ}成長者⁹ (『英和对訳袖珍辞書』)

⁸ 上述の通り、当時の英和辞典の訳語における振り仮名は必ずしも漢字表記を表していたわけではない。ここの「オイタツモノ」も恐らく「成長者」の意味を説明するものと考えられる。辞書によって大量の新語を翻訳した幕末・明治初期の時代背景においては、実際に読まれた可能性が低い、読むとすれば、「セイチョウシャ」と読むのが自然であると考えられる。

⁹ 『英和对訳袖珍辞書』における「成長者」の振り仮名「ライタツモノ」は『和蘭字彙』の項目を参照にして付けたものだと見られる。

godgeleerde, z.m. godsgelerde. (神学者、男性名詞、神の学者) 神学者¹⁰ (『和蘭字彙』)
 Divine, s. godgeleerde, m. (神学者、男性名詞) (Picard Dictionary)
 Divine, s. 神学者 (『英和对訳袖珍辞書』)

natuurkenner, z.m. natuurkundige. (自然主義者、男性名詞、物理学者) 窮理学者 (『和蘭字彙』)
 Naturalist, s. natuurkundige, m. (物理学者、男性名詞) (Picard Dictionary)
 Naturalist, s. 窮理学者 (『英和对訳袖珍辞書』)

overzetter¹¹, z.m. vertolker, vertaler. (翻訳者、男性名詞、通訳、翻訳者) 翻訳者 (『和蘭字彙』)
 Translator, s. vertaler, m. (翻訳者、男性名詞) (Picard Dictionary)
 Translator, s. 翻訳者 (『英和对訳袖珍辞書』)

predikant, z.m. leeraar, prediker. (牧師、男性名詞、先生、説教者) 説法者 (『和蘭字彙』)
 Preacher, s. predikant, prediker, m. (説教師、説教者、男性名詞) (Picard Dictionary)
 Preacher, s. 説法者 (『英和对訳袖珍辞書』)

schelm, z.m. guit, een eerloos mensch. (悪魔、男性名詞、無理な男) 悪逆者 (『和蘭字彙』)
 Scamp, s. schelm, schurk, kwajongen, m. (悪魔、悪役、悪い少年、男性名詞) (Picard Dictionary)
 Scamp, s. 悪逆者 (『英和对訳袖珍辞書』)

『英和对訳袖珍辞書』において、1 つの日本語が複数の英語と対応している項目がある。その理由は、オランダ語の単語の見出しを見れば明らかである(左から『英和对訳袖珍辞書』、その底本 *Picard Dictionary* (筆者による解釈)、日本語の順)。

Chirographer, s. schrijver, m. (ライター、男性名詞) 筆記者

¹⁰ 従来の研究に特に説明されていなかった「〇〇学者」のような語は、実は問題点がある。それは、語の構造から考えれば「〇〇学+者」のように理解し得るし、「〇〇+学者」のようにも理解し得る場合があるということである。例えば、「哲学者」のような語に対して、「哲学ノ者」と理解することが普通ではあるが、「物理学者」のような語に対しては「物理学ノ者」と「物理ノ学者」と、どちらでも理解し得る、且つ意味上特段な違いがない。日本語において、ほかに「癌学会」は「癌ノ学会」であろうか、「癌学ノ会」であろうか、不明なところがある。このような問題は複雑であり、容易に解決できるものだと考え難い。というよりも、たとえこれらの語を1語ずつ調べて明確にすることができたとしても、現実での認識上の混乱を解消することが無理であると考えられる。ということで、実は従来の研究の見方には不十分な面があるが、本論の研究目的に多大な関係がないためあえてそうした配慮を省いて、従来の研究による扱い方に従うことにする。

¹¹ 現代オランダ語では、「翻訳者」の意に当たる語は“overzetter”と書かず、“overzetten”と書く。

Penman, s. schoonschrijver, schrijver, m. (作家、作家、男性名詞) 筆記者

Penner, s. redacteur, schrijver, m. (エディター、作家、男性名詞) 筆記者

Divine, s. godgeleerde, m. (神学者、男性名詞) 神学者

Theologian Theologist, s. godgeleerde, m. (神学者、男性名詞) 神学者

また、当時の漢語接尾辞「者」の多くは英語の“-er”、“-or”、“-ist”、“-ian”などの「ヒト」を表す接辞と対応しているように見える。しかし、オランダ語を通じて訳されているため、実際には英語の接辞との直接的な関連性がないと言ってよい。以下、英語の接辞と対応していない項目の一部を取り上げる(順番は同上)。

School-man, s. school-geleerde, m. (学校学者、男性名詞) 博学者

Singing-boy, s. koorknaap, m. (合唱団、男性名詞) 奏楽者¹²

3.4 中村正直訳『西国立志編』(1871(明治4)年)における「者」の訳語

本節では、原書 *Self-Help* の文を対照しながら、劉による“中村正直は『英華字典』の訳語を参照するうえに作ったものである”という論点を考証する。原書 *Self-Help* の文については「者」の対照関係を示すのに必要な最小程度の部分を添える。以後、用例の引用に際しては、句読点の類を中心とする形式上の調整を施し、明確に誤字である部分に対して訂正を行う。

因みに、『西国立志編』において、振り仮名の付け方は2つある。縦書の本として、1つ目は語の右側に書いて読み方を示す。2つ目は語の左側に書いて意味を示す。本稿は、それを区別するために、右側に当てる読み方を語の上に書く、左側に当てる意味解釈を語の後ろに括弧を付けて、括弧内に書くことにする。

まず、『西国立志編』においては、「金石学者」「察地学者」「算学者」「神学者」「製造者」「創造者」「天学者」「理学者」など「者」を用いて近代的な概念を表す語が多くあることを確かめることができた。それに、「者」のほか、「家」「士」「師」「官」など「ヒト」を表す漢語接尾辞が多く見られる。以下、用例の一部を示す。

From the weaver class have sprung Simson the mathematician, Bacon the sculptor, the two Milners, Adam Walker, John Foster, Wilson the ornithologist, Dr. Livingstone the missionary...

¹² 『英和对訳袖珍辞書』では「奏学者」となっているが誤字と考えて「奏楽者」に訂正した。その根拠は、“koorknaap”は『和蘭字彙』において、その類似表現の項目に対して、全て「楽」の字を使っているからである。1項目を引用する。

kooraal, z.m. aankomend jongeling, die onder den opperkoorzanger in de roomsche kerken zingt. (合唱、男性名詞、将来の若者たちはローマの教会の上の合唱団の下で歌う) 奏楽師ノ弟

traveller, and Tannahill the poet. (p.15)

織工(オリモノシ)ヨリシテ起^{オコ}レルモノハ、算^{シム}学家^{ソン}西模^{ペイ}孫^{コン}雕像^ミ工^ル倍根、上帝道^ナ学^{アダム}士^ワ米^ケ爾^ル
納^ナ兄弟^{アダム}二人、亜^{ジョン}坦^フ話^{ラス}兒^テ客^ル兒、上帝道^{ジョン}学^フ士^{ラス}戎^テ福^ル士^ス的^ル爾、禽^{ウイ}学^ル者^{ソン}維^リ爾^ビ孫、伝^リ法^ビ教^ン師^グ立^ス賓^ス士^ス
敦^ト、詩^{タン}人^ナ丹^ヒ納^ル喜^ル爾等ナリ。(第一編、十三「貧賤ヨリ出タル豪傑ノ人」)

What an event in the artist's life! A surgeon's first fee, a lawyer's first retainer, a legislator's first speech, a singer's first appearance behind the footlights, an author's book, are not any of them more full of interest to the aspirant for fame than the artist's first commission.(p.118)

工^イ芸^カノ人^カニ於^イテ、ソノ関^イ係^カノ大^イナルコト、何^イバカ^イリゾヤ。外^イ科^カ医^カノ始^イメ^イテ病^イ人^カヲ托^イセラルルコト、状^イ師^カ(クジシ)ノ始^イメ^イテ訟^イ事^カヲ托^イセラルルコト、立^イ法^カ者^カノ始^イメ^イテ公^イ会^カニ於^イテ論^イ弁^カスルコト、唱^イ歌^カ者^カ(ウタウタヒ)ノ始^イメ^イテ場^イニ登^イルコト、著^イ書^カ家^カノ始^イメ^イテ書^イヲ公^イニスルコト、何^イモ声^イ名^カニ関^イ係^カ(カカワル)スル、一^イ生^カノ大^イ事^カナリ。

(第六編、十二「ジョンフ^{ジョン}ラ^フラ^ラツ^ツキ^キス^スメ^メン面^{メン}ノ事」)

それに、訳者が前後の文脈によって「ヒト」を表す漢語諸接尾辞を使い分けていることが分かる。“philosopher” に対して、「理学者」若しくは「理学家」と訳し、また“surveyor”、“land-surveyor” に対して、「測量者」或いは「測量官」と訳す。以下のように、用例を示す。

He began to draw, attempted to colour, and practiced the arts of mensuration and surveying, all without regular instruction; and by his efforts in self-culture, he shortly became so proficient that he was taken on as assistant to a local surveyor of ability in the neighbourhood. (p.99~100)

ス^スミ^ミス^ス少年^スノ時^スヨリ、物^スヲ観^ミ察^ススルコトニ、精^ス密^ミニシテ徹^ス底^ミセリ。測^ス量^ミノ術^スヲ学^ミビケル
ガ、其^ス業^ミ大^スニ進^ミミ、測^ア量^シ官^タノ輔^ア手^シトナリテ、阿^オ斯^ウ福^フ及^フビ隣^オ近^ウノ省^オ府^ウニ行^オ旅^ウシ、ソノ経^オ
過^カスルトコロニ從^カヒ、種^カ々^サノ土^ナ、自^カ然^サニ相^カヒ^レ層^カルモノヲ審^カニ査^カ察^セリ。又^カ命^カゼラレテ
処^カ々^サノ煤^カ山^サヲ測^カ量^シシ、大^カニソノ経^カ験^サノ助^カトナレリ。僅^カニ二^カ十^サ三^ス歳^シニ及^カンデ、地^カノ層^カ級^シ
ヲ頭^カハス図^カヲ作^カランコトヲ企^カダテタリ。(一般の「測量者」と区別し、官僚としての測量者を表す)

(第五編、三十五「ウイル^{ウイ}レ^ルム^スス^ミス^スデ^デフ^フロ^ロヂ^ヂー地^ヂ学^エ(チリガク)ニ長^ヂズル事」)

The geologists of the day were not, however, so easily convinced; and it was scarcely to be tolerated that an unknown land-surveyor should pretend to teach them the science of geology. (p.101)

嘗テ罷士ニ於テ、力査遜^{リチャーズン}ノ小室ニ蔵セル化石ノ類ヲ見タル時、斯密士^{スミス}ソノ化石ヲ、地下層級(カサナルジュン)ノ次序ニ^{シタガヒ}循テ舗陳シテ、「コノ石ハ、藍色ノライアスノ中ニアリ。コレハ砂石ノ中ヨリ出ヅ。コレハ^{フルラスアース}漂布泥ヨリ出ヅ。コレハ^{バース}罷士ノ^{ビルディングストーン}屋石ヨリ出ヅト言ヒケレバ、力査遜^{リチャーズン}深クソノ説ヲ信ジケリ。然レドモ当時ノ察地学者ハ、斯密士ヲ知ラズシテ「彼^ヲレノ新進ノ^コ測量者妄リニ察地学ヲ唱^ヲルトヤ、嗚呼ガマシキコトナリ」ト言ヒシトゾ。(第五編、三十五「^{ウイレルムス・ミ・ス・ゴフロードー}維廉斯密士察地学(チリガク)ニ長ズル事」)

また、『西国立志編』において、1つの英単語に対して、前文では、単語の結びつきとして訳しているが、後文になると、「者」を用いて、それを1つの複合語にまとめるようになった、という場合もある(石井(2014))。

例えば、第一編によれば“inventors and discoverers”に対して「新器新術ヲ發明スル人」と訳し、“manufacturers”に対して「品物ヲ製造スル人」と訳している。以下、用例を示す。

Patient and persevering labourers in all ranks and conditions of life, cultivators of the soil and explorers of the mine, inventors and discoverers, manufacturers, mechanics and artisans, poets, philosophers, and politicians, all have contributed towards the grand result, one generation building upon another's labours, and carrying them forward to still higher stages. (p.13)

忍耐(シンボウ)恒久(キナガ)ノ心ヲ以テ職事(シゴト)ヲ勉強スル人、尊卑貴賤ノ別ナク、〔土地ヲ耕墾^{コン}(ホリカヘス)スル人、^{コウ}礦山(カナヤマ)ヲ檢尋(サガス)スル人、新器新術ヲ發明スル人、工匠ノ人、品物ヲ製造スル人¹³、詩人、理学者、政学家〕コレ等ノ人、古ヨリ今ニ至ルマデ、次第ニ工夫ヲ積メルモノ、合湊^{ソウ}(アツマリ)シテ盛大ノ文化ヲ開ケルナリ。

(第一編、七「貴賤ニ限ラズ、勉強忍耐^{タイ}(ホネヲリシンボウ)ノ人、世ニ功アル事」)

しかし、第二編になると、“inventors”を「創造者」と訳し、“manufacturers”を「製造者」と訳すようになっている。

His originality as an inventor has indeed been called in question, like that of Watt and Stephenson. (p.30)

¹³ 訳文では、原文による“manufacturers, mechanics and artisans”の順を“工匠ノ人、品物ヲ製造スル人”のように、逆にしたと考える。

ワウト 瓦徳ノ新機ヲ用ヒテ、各般(イロイロ)ノ工事場、益々繁盛ナリケルガ、ソノ最初ニ^{アラハ}頭ルモノハ、紡棉工場(モメンイトヲヨルサイクバ)ナリ。コノ工事ノ基(ドダイ)ヲ建(タテ)タル人ヲ^{リチャドアーカライト}力査阿克来ト云フ。ソノ人トナリ、巧思創造(クフウガジョウヅ)ノオアルノミナラズ、ソノ実事ヲ^{ココロム}試ルニ、精力アリ、智識アルコト、尤モ庸衆(ナミノヒト)ニ^{コエ}超タリ。^{アーカライトインヴェントル}阿克来^{創造者}ノ称ヲ得タリシガ、ソノ始メニ当リテ、頗(ヨホド)ル異論ヲ受ケタリ。蓋シ^{アーカライト}阿克来ノ^{スピンニングマシン}紡棉機ニ於ル、恰(トント)カ^{ワウト}モ瓦徳ノ蒸気縮密機器ニ於ル、^{ステブンソン}士提反孫ノ^{ロコモチイフ}行動機器ニ於ルガ如ク。

(第二編、十「^{リチャドアーカライト}力査阿克来并ニ^{スピンニングマシン}紡棉機(モメンイトヲヨルシカケ)」)

Sir Robert Peel, the first baronet and the second manufacturer of the name, inherited all his father's enterprise, ability and industry. (p.35)

^{ロブトピール}羅伯比耳ハ、第二世ノ^{製造者}ニシテ、始テ^{バロネット}巴洛涅的ノ^{ツツケ}爵(男爵ニ垂ル者)ヲ得タルモノナリ。才能アリテ勉強ナルコト、其父ニ彷彿セリ。

(第二編、十一「比耳并ニ印花機白布ノ上ニ花草ヲ印スル機器」)

もう1例として、以下で示すように、“baker”という語に対して、前文では「麵包ヲ焼クモノ」という長文で訳したが、後文になると「焼麺者」の1語と訳すようになった。

Foreign not less than English biography abounds in illustrations of men who have glorified the lot of poverty by their labours and their genius. In Art we find Claude, the son of a pastrycook; Geefs, of a baker; Leopold Robert, of a watchmaker; and Haydn, of a wheelwright; whilst Daguerre was a scene-painter at the Opera. (中略) Of like humble origin were Haury, the mechanician, of a baker at Orleans; (後略) (p.18)

自己ノ勉強ト、才能トニヨリテ、貧賤ヨリ崛起(ソビヘオコリ)シテ大名ヲ世ニ揚^ゲシモノ、外国人ニ於テ、ソノ例(タメシ)、マタ少^ナカラズ。画家^{クロウド}古勞徳ハ、麵食(パン)ヲ作ル者ノ子ナリ。雕像工^{ギーフス}奇弗士ハ、麵包ヲ焼クモノノ子ナリ。画家^{リウボールド}留波爾徳・^{ロベルド}羅伯ハ、^ト時^{ケイシ}厄標匠ノ子ナリ。樂歌ヲ作レル有名ノ^{ハイドン}海曇ハ、車匠ノ子ナリ。始テ影相(シャシン)ヲ金版(カネノノバシイタ)ニ留ムルコトヲ發明セシ^{ダゲール}達礙爾ハ、戲台(シバイ)ニ用フル風景ヲ画ケル者ナリシナリ。(中略) 器学家^{ホーテフエレ}荷的弗列ハ、^{オルレンス}阿連士ノ^{焼麺者}焼麺者ノ子ナリ。(後略)

(第一編、十七「卑賤ヨリ起テ大名ヲ得タル外国人ノ事」)

このように、本書において「創造者」「製造者」「焼麺者」のような「者」の翻訳語は、臨時に1つの複合語にまとめたと見られる場合があり、当時また1語として定着していないことを示した。

『西国立志編』における「者」の訳語を観察したうえで、ここで、劉が考察を行った本書の「者」が構成した訳語¹⁴を再度取り上げて、その訳語の漢語表記を『英和对訳袖珍辞書』(表に、「袖珍」と略す)における漢語表記と比較して、どのように一致しているかを試みた。以下のように、表にして示す。

表1 漢語表記による用例比較

番号	原書英語	西国立志編	袖珍
第一編、十三	ornithologist	禽学者	
同上	preacher	説法者	○
同上	navigator	航海者	○
同上	philosopher	理学者	○
第一編、十四	astronomer	天学者	
同上	mathematician	算学者	○
第一編、十七	mineralogist	金石学者	
同上	baker	焼麺者	
同上	naturalist	金石草木獣学者	
第二編、十	inventor	創造者	○

¹⁴ 劉の表では、「有力者」という語が“ringleader”の訳語として取り上げられている。しかし、原書 *Self-Help* と対照して読めば、“powerful help”が「有力者ノ助け」と訳され、“ringleader”が「叛乱の頭人(ホットウニン)」と訳されていることが分かったため、「有力者」の語を省くことにした。以下のように示す。

Being too poor, however, to undertake such an enterprise without powerful help, he set sail for England in the hope that he might there obtain it. (p.140)

フィップス
費布士家貧シカリケレバ、カクノ如キ大事ハ、有力者ノ助^カヲ假^カザレバ為シ得ベカラズト思ヒ、英国
ニ航シ直^{タダチ}ニ官府ニコノ事ヲ請ヒケリ。

Phipps, however, was not a man to be intimidated; he seized the ringleaders, and sent the others back to their duty. (p.141)

フィップス
費布士ハコレ等ニ驚^ハベキ怯者(オクビヤウモノ)ニアラザレバ、叛乱ノ頭人(ホットウニン)ヲ^{ハウバク}縛^ハシ
バリシ、ソノ余ノモノヲシテ、退^トテソノ職事ヲ執ラシメタリ。

同上	barber	剃頭者	
第二編、十一	manufacturer	製造者	
第五編、二十五	land-surveyor	測量者	
同上	geologist	察地学者	
第六編、十二	legislator	立法者	
同上	singer	唱歌者	
第八編、七	holy man ¹⁵	神学者	○
第八編、二十五	contractor	包弁者	

この表から、漢語表記の同異のみを比較してみれば、『西国立志編』において「説法者」「航海者」「理学者」「算学者」「創造者」「神学者」の6例は『英和对訳袖珍辞書』においても見られる。それほど多くないが、少なくとも日本語において、『西国立志編』以前、同様な新概念を表すのに、「者」が付く同様の翻訳語が既に存在していることを示している。

一方、『英和对訳袖珍辞書』には先例のない語について、考えてみたい。『国語大辞典』の記述・例文によれば、これらの語の中、「天学者」「剃頭者」「製造者」「測量者」「立法者」「唱歌者」のような語の語幹の部分は、『西国立志編』以前に既に存在していた語である。したがって、先例がない語をどうして訳したのかについて、訳者の中村は既存の語をもって、「者」と結びつくという翻訳方法で訳語を創出していた可能性があると考えられる。

以上の考察によれば、まず、訳者は「ヒト」を表す漢語系諸接辞に対して、それぞれ違う意味・特徴を持つことを理解したうえで、前後の文脈によってどちらを用いるか決めたと考えられる。それに、訳者はどのようにして訳語を作ったのか、用例の観察に基づいて探ってみた。1つは、訳者が翻訳しているうちに、単語の結びつきとする長文を、「者」をもって1つの複合語にまとめた場合があると見られる。もう1つは、訳者は既存した語を用いて、「者」と結びつくことで新語を創出したという可能性もある。

したがって、『西国立志編』は何かを参照にしたというよりも、訳者自身の知識によって独自に訳した可能性も有り得る。

3.5 総括と考察

本稿は、『諳厄利亜語林大成』『和蘭字彙』『英和对訳袖珍辞書』、そして『西国立志編』に対する考察を行った。その結果、翻訳上における「者」の多用は、従来の説——『英華字典』のような中国後期の洋学資料から大きな影響をうけたという論が不適切であることを指摘し、正確には蘭和辞書からの影響であると主張することで、本稿の目的(1)「者」は何故英和辞書や翻訳書に多く用いられたのか、ということを明らかにした。

¹⁵ 劉では、「神学者」の原語を“theologist”と対応しているが、筆者の確認では“holy man”となる。

4. 近現代漢語接尾辞「者」の展開過程

本節は、主に幕末・明治初期の新聞雑誌を通して、「者」の展開過程を整理する。新聞雑誌のほか、辞書類・英語教科書類、洋学の先達者による著書や翻訳書など多様な資料を扱うことにしたが、内容の複雑化を避けるため、この部分を詳しく論じず、表で示すことにする。

考察対象とする新聞雑誌の中、『明六雑誌』と『国民之友』に対して、『日本語歴史コーパス(CHJ)』を利用することにする。¹⁶

本論に入る前に、説明しておきたいことが1点ある。それは、本節は新語の創出に注目するため、漢語接尾辞「者」の展開過程を論じる際に、「学者」「智者」「使者」のような古来中国語から借用した語¹⁷、且つ新しい意味が生じたと考えにくい語を省くことにすることである。

4.1 初期的な新聞雑誌において

本稿は、先ず日本における初期の新聞雑誌に対して調べてみた。調査の限りでは、「者」を接尾辞として用いることが少なかったが、「記者」¹⁸「術芸者」「筆記者」「翻訳者」の用例が現れている。以下、用例を取り上げる。

仏国にては財政官之を思慮して此の急を救ふの策を用ひて不足を資くれども、此国にては猶未た之を施すに至らず。又土人の莊園及び官領の地多し。此地より毎年二千五百万又は三千万を財櫃に得るは少しも害なかるべし。是に由て推考るときは(巴里斯新聞

¹⁶ 「1字+者」の語に対して検索条件は以下の通りである。

(短単位検索・明六雑誌(1874～1875)(コア・非コア))

語彙素=_者

「2字以上+者」の語に対して検索条件は以下の通りである。

(短単位検索・明六雑誌(1874～1875)(コア・非コア))

キー：語種=漢語

後方共起1(キーから1語)：語彙素=者

『国民之友』を対象とする検索条件は同上である。

¹⁷ 古来にあった語であるかどうかを判断する基準として、不十分なところがあるが、従来の研究に従って、主に漢語の熟語集として最も権威のある書物である『佩文韻府』に出典があるかどうかによって判断する。

¹⁸ 『佩文韻府』には「記者」の見出しがあるが、現代語における「新聞雑誌などの報道機関で取材、編集などの仕事に携わる人」の意味は古来なかったはずである。新しい意味を生じたという点で、「記者」を扱うことにする。

紙記者の述る所)以大利の財政は世の普く思ふよりは限りなく好し。然らば国債多しと臆断して自ら心を痛むることあるも其の難易利害を定むるに足れり。宰臣にて取極めたる運上は政房にても承允すべきは疑あることなし。

(洋書調所編訳『官板海外新聞』¹⁹第五卷、廿一丁表、1863(文久3)年)

蘭頓にて新に開ける全世界の展覧場に加はらんことを英国より求め来りしが、法王暫らく猶予して答ざりしが、後承允して正大に崇重すべき返答を為たり。英国政府にては国中に居住する術芸者²⁰の為には是の如く侈大ならず。

(洋書調所編訳『官板海外新聞』第五卷、二十三丁表、1863(文久3)年)

日本貴公子徳川民部太輔様、欧羅巴諸国ヲ経歴スルニ、山川ノ奇景数点順覧シ、遂ニ「ロンドン」都名ニ着セリ。其時英国ニ於テ高名ナル全権兼通弁官「アレキサントル」人名、右貴公子ヲ案内セシトゾ。貴公子英国ノ政法ヲ知ランガタメ、御供ノ人々ト共ニ改衣精粧威儀ヲタバシ給ヒ、上院ニ行キ給ヘリ。総テ外国ノ事ニ係タル筆記者^{ヒツキシヤ}ノ長「ロルドスタンレイ」人名ノ命ニ依テ、「シューボルト」人名ヲシテ百般ノ事件ヲ貴公子ニ解通セシム。

(ベーリー(Bailey)編訳『万国新聞紙』²¹第三卷、1868(慶応4)年)
第五国文を以て有用の書を訳する事 漢籍にても洋書にても諸学科有用の書は悉く国字を以て之を翻訳し、広く天下に分与すべし。只漢字洋字を学ぶ者は各国交際の用に供する通弁人と各国の書の翻訳者とのみに止りて事足る可し云々。

(柳河春三^{しゅんさん}編訳『中外新聞』²²第11号、1869(明治2)年3月)

4.2 『明六雑誌』において

1874(明治7)年3月に創刊された、日本最初の学術啓蒙雑誌『明六雑誌』は、明六社の月2回の例会における講演内容の公表を目的とした雑誌である。明六社という結社は1873(明治6)年7月に、アメリカ帰りの森有礼^{ありのり}が西欧のように知識人たちが集って親交と学識を深

¹⁹ 『官板海外新聞』は蕃書調所の後身である洋書調所によって、『官板バタヒヤ新聞』(1862(文久2)年)から改題されたものである。『官板バタヒヤ新聞』は幕末の洋学校である蕃書調所にバタビヤ(インドネシアの首都ジャカルタで、オランダ領時代の呼称である)のオランダ政庁機関紙の海外ニュースを編訳して刊行されたもので、日本最初の新聞と言われる。

²⁰ 「芸術」という語が定着される前に、「術芸」として使われていたことがある。

²¹ 『万国新聞紙』は1863(慶応3)年にイギリス人の宣教師である Bailey が横浜で創刊したものである。

²² 『中外新聞』は1868(慶応4)年に、新聞雑誌の先駆者である幕末の洋学者の柳河春三によって創刊されたもので、日本における最初の本格的な新聞と言われている。この新聞は外国新聞を翻訳することによって外国事情を紹介しつつ国内事情も報道し、当時としては日本全国で影響力のあった刊行物である。

めつつ民衆を啓蒙するために設立した結社であり、当時の洋学の先達者である福沢諭吉、中村正直、西周などがメンバーとして定期的に集い講演するようにしていた。

『明六雑誌』は2年間足らずで廃刊することになったが、明治初期に始めて登場した学術啓蒙雑誌として、創刊以来広範な読者層を持ち、文明開化時期の日本に大きな影響を与えていた刊行物である。その中で、新概念を表すのに、漢語接尾辞「者」を用いたことが少なくない。「1字+者」の語として、「著者」がある。以下、用例を示す。

是ハ外交小言ノ著者ガ言ッタ通り、政府ガ元尊王攘夷ト云フ面ヲ蒙^{カフ}ッテ居タカラ、マダ其芝居ノ余党ガ居ルデ困ルダロウト云フコトダ。

(西^{あまね}周「内地旅行(十一月十六日演説)」『明六雑誌』第23号、1874(明治7)年12月)

「2字以上+者」の語には、「経済学者」「神理学者」「政事学者」「理学者」のような「～学+者」の語がある。以下、「経済学者」の例を示す。

昔時欧洲ニ智者アリ。始テ保護税ノ法ヲ設立シテ、此弊ヲ済ヒ、米^米国ニ於テハ、目今猶之ヲ襲用セリ。我国今日ノ形勢国運ヲ維持スルノ術、略独保護税ノ法ニ倣フニ在ルノミト云ヘリ。余曰ク此説非ナリ。夫レ保護税ノ保護ニ非ズシテ、却テ一般国民ノ害ヲ招ク。悪法タルコトハ西洋各国経済学者ノ弁明スル所ニシテ大抵異論アルコトナシ。

(津田真^{まみち}道「保護税ヲ非トスル説」『明六雑誌』第5号、1874(明治7)年)

「2字以上+者」の語には、「～学+者」の語があるほか、「愛国者」「柄政者」「改革者」「開化者」「行險者」「私有者」「掌計者」「真為政者」「選^選択者」「代議者」「代理者」「当路者」「編輯者」「編集者」「盲信者」のような語が見られる。以下、用例の一部を取り上げる。

諸撰^撰択(大統領副統領ノ撰^撰択若クハコングレスノ代議者或ハ各邦ノ政官及ビ法官ノ撰^撰択)ノコトアルニ方テ、年齢二十一届テ合衆国ノ臣民タル男子ノ發言スル權利(〔按〕撰^撰択ノ會議ニ加ハリテ所見ヲ述ル權利ヲ云フ)ヲ剥奪シ或ハ之ヲ減縮スル。(後略)

(加藤弘之^{ひろゆき}訳・トムソン作「米国政教(前号ノ続キ)」『明六雑誌』第6号、1874(明治7)年)

(前略)而シテ又国ノ改革者タルヲ其身ニ自負スル輩ノ如キハ、畢竟當時輿論衆議ノ已ム可カラザルヲ知り、以テ之ヲ行フニ在レバ、譬ヘバ猶積水ノ潰決シ、其勢ノ禦ク可カラザルニ至リ、流ニ順テ泛然浮游スル者ノ如ク然リ。而シテ唯其改革者ノ称譽ス可キハ、當時特ニ欠ク可カラザル事由ノ既ニ瞭如タル。

(箕作麟祥^{りんしょう} 訳「開化ノ進ムハ政府ニ因ラズ人民ノ衆論ニ因ルノ説(バツクル氏ノ英
国開化史ヨリ抄訳)」『明六雑誌』第7号、1874(明治7)年5月)

希臘^{ギリシア}ニ於テハ人民自由ノ説夙ニ行ハレ、「スパルタ」国ノ如キハ、国ノ主權ヲ人民ノ
代理者^{りんしやう}三十名ノ議院ト「エフルス」ト称スル五名ノ行政督理官トニ帰シ、以テ之ヲ
掌握セシメ、王ハ僅カニ唯戦時兵ヲ指揮スル權アルニ過ギズ。

(箕作麟祥「リボルチーノ説(第九号ノ続)」『明六雑誌』第14号、1874(明治7)年7
月)

培根^{ペイコン}、英王^{ヘンリー}第七ノ法度ヲ賛シテ、王ノ立ル法度ハ深遠ニシテ粗鹵ナラズ、目前急遽
ノ計ヲ為ズシテ後來民生ノ福ヲ謀レリトイヘリ。コノ深遠ト粗鹵ト二者ノ間ヲ識別セ
ンコトヲ要ス。所謂深遠トハ立法者^{りっぽうしや}タシカニソノ目的ヲ達シ、十全ノ功ヲ遂ンコトヲ期
スレドモ、ソノ時代マデ久シク慣安スルコトヲ一旦ニコレヲ改メ、民ノ耳目ヲ驚スコト
ヲ為サズ、特ニ自然ノ時勢ニ随ヒ、天然ノ順便ニ就テ、次第ニコレヲ行ヘバ多年ノ後自
ラ変化スルコトナリ。

(中村正直訳「西学一斑ノ続」『明六雑誌』第23号、1874(明治7)年12月)

4.3 『東洋学芸雑誌』において

1881(明治14)年10月に、日本で最初の学術総合雑誌である『東洋学芸雑誌』が東洋学芸
社によって創刊された。本雑誌において、新しい概念を表すのに、漢語接尾辞「者」が用い
られた語が『明六雑誌』より、いっそう多く現れている。「1字+者」の語には、「記者」「著
者」の語が見られる。以下、「記者」の用例を引用する。

(前略)是レハ、イビー氏ガ自ラ日報社ニ行キ頻ニ記者^{きしや}ノ論ヲ賛成シテ余ガ事ヲワルク
云ヒシヲ以テ記者^{きしや}ハ実ニ然ルコトカト思ヒ、(後略)

(井上哲次郎「批評 日々新聞ノ宗教論ヲ評シ併セテイビー氏ニ答フ」『東洋学芸
雑誌』第20号、1883(明治16)年5月)

「2字以上+者」の語には、「～学+者」のような語が多く見られるようになった。それ
は、「化学者」「気象学者」「刑法学者」「鉱山学者」「語学者」「地震学者」「人種学者」「数学
者」「星学者」「政治学者」「生物学者」「地学者」「地質学者」「哲学者」「天文学者」「動物学
者」「博物学者」「病理学者」「物理学者」「法学者」「理学者」のように、様々な分野と結び
付いている語である。これらの語から、当時の知識人が西洋の近代的な知識を多く吸収しよ
うとする姿勢が見られる。

「～学+者」の語が見られる一方、「改良論者」「政治家理論者」「反対論者」「暴論者」のような「～論+者」の語も少なくない。1例を示せば次の通りである。

但シ以上論ズル所ハ全ク極端ノ論ニシテ、決シテ實際ニ生ズベキコトニアラズ。改良論者ガ将来如何ニ増加スルモ、如何ニ熱心ニ雑婚策ヲ促スモ、決シテ其千分一万分一モ容易ニ行ハルベカラザルハ、固ヨリ論ヲ俟タザルナリ。然レドモ改良論者ガ西洋人種ノ血液ヲ取テ日本人種ヲ改良セント欲スル以上ハ、一人ニテモ雑婚者ノ多ク、雑種ノ多キヲ欲スルハ当然ノコトナレバ、論者ハ可成右ノ極端論ノ實際ニ行ハレンコトヲ希望スルハ必然ト云フベシ。

(加藤弘之「人種改良ノ弁(前号ノ続)」『東洋学芸雑誌』第55号、1886(明治19)年4月)

そのほか、「愛国者」「愛読者」「為害者」「依頼者」「演説者」「音楽者」「解釈者」「改良者」「観測者」「起草者」「競争者」「銀行者」「結納者」「講談者」「賛成者」「雑婚者」「指揮者」「使用者」「主張者」「主任者」「消費者」「所有者」「信仰者」「実業者」「生産者」「製造者」「生存者」「専制者」「卒業者」「代理者」「談話者」「聴講者」「締盟者」「当局者」「投稿者」「投選者」「入会者」「発言者」「発明者」「発見者」「被害者」「被復讐者」「復讐者」「保護者」「謀殺者」「立案者」のような語が見られる。

以下、用例の一部を取り上げる。

マウント、ウォールンノ製造所ニ用フル所ノ物質ハ皆道路修繕ニ用ヒタルノ石炭末ナリ。而シテ石炭末タルヤ、到ル所ノ炭坑及製造所等ニハ必ズ生ズルモノニシテ、其所有者ハ喜ンデ運び去ラレンコトヲ望ムベシ。今炭末ヲ運ビ炉ヲ築ク等ノ費用ヲ算シ、之ヲ煖炉ニ用フル下等ノ石炭ト比スルニ約ソ三倍ノ費ヲ省キ、其価モ頗ル下直ノモノニシテ、毎千英尺ヲ五十銭ニ販買スルモ製造者ニハ四十銭ノ利アリ。又之ヲ煤氣ト比スルニ其発熱力三倍乃至五倍ナレバ、五十銭ノ気体燃料ハ八十五銭ノ煤氣ト同用ヲナシ、製造者ニ却テ利益アルノミナラズ使用者ニモ亦大利アリ。

(「翻訳 水を燃料ニ友スル説(前号ノ続)」『東洋学芸雑誌』第3号、1881(明治14)年12月)

政府工業ニ従事シテ其益ヲ見ルベカラザルヤ、此ノ如シ。今復之ヲ三省シテ其生産者ニ如何ナル関係ヲ来タスヤヲ思惟スルニ、政府自ラ製造ヲ勤ムルニ於テハ費額ノ一点ノ如キハ大抵始メヨリ省ミル処ナク、之レガ価値ヲ算計スルニ、啻ニ材料及ビ労力ノミニ由レルヲ以テ、其製作品ハ人民産製ノ品物ニ比スレバ廉ナルベケレバ、消費者ノ一方ヨリ觀レバ此品物ヲ購求スルノ利タル、弁ヲ俟タズト雖モ、是レ、特ニ消費者ノ利ニ止マリテ、偏ニ一局部ヲ利スルノ見ノミ。

(川田徳二郎「日本製造論一斑(前号ノ続)」『東洋学芸雑誌』第6号、1882(明治

15)年3月)

社会之顕象 ノ出版アリ。府下ノ学芸政治雑誌ノ数ニ更ニ一ヲ加ヘタリ。寄草者ノ中ニハ己ニ文壇ニ名ヲ知ラレタル学士モ見ヘ、殊ニ主意書ノ中ニ「論文ハ皆ナ悉ク起草者若クハ立案者ノ姓名ヲ記シ其誰ノ論タルヲ公示ス」トアルハ甚善シ。

(「批評 社会之顕象」『東洋学芸雑誌』第80号、1888(明治21)年5月)

教育学芸之標準 青年之教化者、女権之拡張者、社会ノ改良者、元気ノ恢復者ヲ以テ自ラ任ズル同雑誌ハ、其第三号ヨリ改良ヲ加ヘ紙数ヲ増シ体裁ヨク出来上レリ。日本ノ社会ヨ、爾ノ教化者ヲシテ長寿ヲ保タシメヨ。

(「批評」『東洋学芸雑誌』第80号、1888(明治21)年5月)

例ヘバモントネグロのダニエル第一世の法典第三十九条にも「復讐ハ謀殺者に限り其親戚に及ぼす可らず」とあります。斯の如く、復讐者被復讐者の範囲を縮小して、其数を減じました。

(穂積陳重^{のぶしげ}講演・林茂淳^{もじゅん}筆記「刑法進化の話」『東洋学芸雑誌』第85号、1888(明治21)年10月)

4.4『国民之友』において

1887(明治20)年2月に、有名な評論家である徳富蘇峰^{とくとみそほう}は、『国民之友』²³という雑誌を創刊した。『国民之友』における漢語接尾辞「者」は盛んに用いられているようになった。当時漢語接尾辞「者」を用いて多くの新語を作り出したことが想像できる。

「1字+者」について、『国民之友』において「記者」「著者」のほか、「罪者」「哲者」のような語も現れていた。従来使われたことがある「1字+者」の「記者」「著者」が『明六雑誌』ではそれぞれ僅か数例しかないが、『国民之友』になると、「記者」323例、「著者」423例で、多く用いられるようになった。

以下、「筆者」の用例を取り上げる。

(前略)而して公用方秘録の筆者が果して充分の知識を有し、充分の労力を致し、充分の目的を抱き、充分の自由を得て、之を記述せしや否やは論ずるまでもあらず。

(朝比奈知泉^{ちせん}「開国始末を読む(其二)」『国民之友』第21号、1888(明治21)年5月)

²³ 『国民之友』は1898(明治31)年8月の第372号をもって廃刊した、長い年月に渡り発刊されていた民間雑誌で、日本初の総合雑誌である。この雑誌は明治維新、自由民権の激動期を経た明治20年代の言論・思想界に大きな影響を与えた刊行物である。

「2 字以上+者」の語には、「科学者」「化学者」「国学者」「語学者」「数学者」「哲学者」「仏学者」「仏法学者」「文学者」「兵学者」「法学者」「梵学者」「入学者」「洋学者」のような「～学+者」の用例が使われつつある。以下、「科学者」の用例を示す。

殊に近来に至りては哲学といふ新趣義の科学者社会に崇尚せられ上プラトウ、アリ
ストートルより下ミル、ハミルトン、スペンセルの門戸に沿て体を捧げ以て其残餐余
漿を乞ひ遂に天地を縛して窮窟なる。理中に投ぜんと企てたり此の故に論、政治に及
べば則ち政治哲学と云ひ社会に及べば則ち社会哲学と云ひ宗教に及べば則ち宗教哲
学と云ひ経済に及べば則ち経済哲学と云ふ。

(鷹陵外史「情感の世界」『国民之友』第 16 号、1888(明治 21)年 2 月)

ここの「科学者」は、現代語とは少し違ったニュアンスを持っており、「自然科学」を
研究する人だけではなく、「人文科学」や「社会科学」を研究する人をも指すようにして
いた。

また、「～論+者」の用例が多く見られるようになった。「国権論者」「無神論者」「唯物
論者」「改良論者」「国粹論者」「民権論者」「民約論者」「政治論者」「標準論者」「創造論
者」「道德論者」「改進黨論者」「公許論者」「共和論者」「国体論者」「海防論者」「拡張論者」
「皮想論者」「實用論者」「有神論者」「折衷論者」「宗教論者」「国粹保存論者」「文明輸入
論者」「改進黨急進論者」「国粹保存論者」「自由貿易論者」「自由平等論者」等が見られる。

これは、新しい文化からの刺激を受けて、多様な観点が生じた当時の社会を反映している
と思われる。以下、用例の一部を引用する。

所謂改良論者ノ本家本元ト拝崇スル諸国ヲ愛慕スルト同時ニ、自国ヲ等閑ニスルノ
思想自カラ脳裡ニ侵漸センコト是レナリ。

(志賀重昂^{しげたか}「如何ニシテ日本国ヲ日本国タラシム可キヤ」『国民之友』第 10 号、
1887(明治 20)年 10 月)

蓋し著者の議論たる西洋の無神論を拡張布衍する者なれば之を敵とすれば歐洲の無
神論者唯物論者を尽く敵とせざる可らず、其関係する所広く且大いなり。

(高橋五郎「仏教活論本論」『国民之友』第 15 号、1888(明治 21)年 2 月)
一個独立、公明正大なる道を履む者なれば我が校の卒業生中には、官海に浮んで役人
となる者もあらん、民間に入て民権論者となる者もあらん、商工業に従事して、金持
となる者もあらん、(後略)

(金森通倫^{みちとも}「同志社の規模及其目的」『国民之友』第 19 号、1888(明治 21)年 4 月)

「～学+者」「～論+者」のほか、「～業+者」のような語が見られることに注目したい。それは、「実業者」「産業者」「創業者」「営業者」「工業者」「商業者」である。以下、用例の一部を示す。

維新の改革は青年書生の改革なり。蓋し徳川氏の天下は保守力に拠りて維持せられたるものなり。故に此の力を強大ならしむるの一点には、彼の徳川の創業者は、殆んど余力を剩さざりしなり。然れども其の一たび意外の変故に遭遇するに際するや、彼の老成人等は茫然として、自から度を失しなり。

（「新日本の青年及び新日本の政治(一)」『国民之友』第6号、1887(明治20)年7月）
若し専売特許を止めんと欲するの議、全国の製造家商業者の口より出しめば、天下の専売特許を行ふもの誰れか之を恐れざらん。

（「建白書を出したる後は如何にすべきや」『国民之友』第13号、1887(明治20)年12月）

今日本の工業者なりと称する人々の興業法は二十三年後の日本人民が之れに同意する方法なる歟。

(肥塚 竜 ^{こいつかりゅう}「二十三年後の日本」『国民之友』第15号、1888(明治21)年2月)

東京電報は国家の要素、社会の骨髓たる実業者多数の利益を主眼とす。

（「東京電報」『国民之友』第20号、1888(明治21)年4月）

「～権+者」の語中、「主権者」「変革主権者」「全権者」「有権者」「執権者」のような語が現れる。以下、用例の一部を示す。

彼既に此の如きの権力を有す。天下何物か彼の有にあらざるものあらん、所謂る政権の不平均は、財産の不平均、知識技能の不平均、自由の不平均、快樂の不平均を含蓄するものなり。彼れ既に一国の政治に於て無限の主権者なり。

（「平家物語を読む」『国民之友』第5号、1887(明治20)年6月）
鉄道には国の鉄道、府県の鉄道、市町村の鉄道（馬車鉄道の如き）、の区別あるは勿論なれば其の種類に依りて其の有権者を異にするなり。

（宇川盛三郎「道路条例」『国民之友』第24号、1888(明治21)年6月）

因みに、「～権+者」と関わり、現代日本語においても法律用語²⁴としても使われている語として、「営業者」「関係者」「監督者」「管理者」「教唆者」「候補者」「消費者」「所有者」「主任者」「責任者」「代表者」「代理者」「著作者」「配偶者」「犯罪者」「被害者」「被治者」「保

²⁴『法律用語辞典』第4版(有斐閣、2012年)に見出しのある語を指す。

護者」「納税者」「労働者」「有権者」などの語が多く見られる。

以下、用例の一部を示す。

然れども或る学者がイエスキリストが配偶者なく独身にして生涯を送りしは、当時完全無欠にしてその配偶者たるべき婦人なかりしに由るならんと説をなす如くキリスト教は完全無欠の配偶者なきが故に、暫く独身独行すべし。

(横井時雄^{ときお}「基督教と日本将来の政治」『国民之友』第 16 号、1888 (明治 21) 年 2 月)

頃ろ又た醤油税を改正する所あらんとするの風説あり。而して其要を聞けば税率を寛にし、脱税を防ぎ、是迄出来上りし醤油を検査して課税するがために、納税者に非常の手数と、迷惑を掛け、徴税費に非常の費用を掛けたる検査法を一変して、直ちに諸味に向つて検査を施すと云ふ。

(「醤油税則の改正」『国民之友』第 21 号、1888 (明治 21) 年 5 月)
高等警察は実是一国秩序の保護者なり。然れども復た時としては、此の秩序の保護者たる高等警察権の妨害より保護せらるるの必要を、国民の間に感ずるに至る。

(「高等保安警察」『国民之友』第 34 号、1888 (明治 21) 年 11 月)

また、現代日本語においてもよく見かける日常的な言葉として、「加入者」「喫烟者」「希望者」「合格者」「志願者」「志望者」「主張者」「就職者」「出席者」「紹介者」「説明者」「退会者」「入学者」「編纂者」「報告者」「傍聴者」「無資格者」「旅行者」などの語が用いられている。

以下、用例を取り上げる。

判任官には普通試験を用ひ、合格者の中より各官庁に於て撰拔し、二箇年以上の間見習となりて、事務の練習を経し後ち欠員あるを俟て本官となる。

(「文官登用試験法の概畧」『国民之友』第 7 号、1887 (明治 20) 年 8 月)
少シク上位ニ傾キタル被撰者ヲ見レバ、名誉ヲ得ルニハ此ノ上ナシ等ノ目的ニテ、先ヅ県治上及郡中ノ得失ニ至リテハ、トント御留守ノ方ニ御坐候。其他実ニ枚挙ニ遑アラズ。如何セン就職者ノ名誉ヲ毀損スルノ恐レアレバ残念ナガラ不申述候。

(古川しみ「撰挙の弊害」『国民之友』第 15 号、1888 (明治 21) 年 2 月)
世の中は唯だ一の喫烟者のみあるに非ず、唯だ一の酔漢のみあるに非ず、世の中には千差万別の人あり。

(「社交上に於る婦人の勢力」『国民之友』第 24 号、1888 (明治 21) 年 6 月)
頃日石川県会に於ても、自由派の議員より、改進黨の議員某が議員たるの資格を有せず

との、紛議出で来り。而して近頃又新潟県会に於ては、自由派の議員より改進黨の議員某が、資格を有せずとの建議出で来り、遂に無資格者と見做し、而して県知事は其決議を不法と認め、之が為に県会を中止せられたり。

(「旧自由党と改進黨の軋轢」『国民之友』第 34 号、1888(明治 21)年 11 月)

4.5 新聞雑誌以外

新聞雑誌のほか、辞書類・英語教科書類、洋学の先達者による著書や翻訳書において、漢語接尾辞「者」の使用例を調べてみた。その結果を以下の表で示す。この表からも分かるように、明治期に入って、当時の洋学者によって、新しい概念を表すためには、「者」の使用が少しずつ増えていく。

表 2 新聞雑誌以外による漢語接尾辞「者」の使用例

年	資料名	用例
1866(慶応 2)	^{あだちばい け} 足立梅景 ^{イギリス} 英吉利文典字類	記者
1867(慶応 3)	阿部友之進 挿訳英吉利文典	記者
1869(明治 2)	福沢諭吉 世界国尽	翻訳者
1871(明治 4)	吉田庸徳 袖珍英和節用集	化学者、窮理学者、建築学者、語学者、植物学者、神学者、数学者、発明者、律学者
1872(明治 5)	福沢諭吉 学問ノススメ	演説者、改革者、開化者、聴聞者
1873(明治 6)	^{こうえいいち} 高鋭一 訳 訳言鈔 (Noah Webster 原書 <i>Spelling Book</i>)	天学者、貿易者
1875(明治 8)	福沢諭吉 文明論之概略	皇学者、執権者、思想者、専権者、有権者、…
1876(明治 9)	福沢諭吉 学者安心論	愛国者、改進黨者、天文学者、民権論者、新聞記者
1883(明治 16)	^{りゅうけい} 矢野竜溪 経国美談	執政者、同志者、理学者、有志者、…
1885(明治 18)	岡本信訳 万国史直訳(実用) (N.Hawthorne 原著、Parley 編)	掌握者、信仰者、創造者、誘導者、…
1886(明治 19)	天野為之 経済原論	消費者、初学者、被雇者、勞力者、…
	徳富蘇峰 将来之日本	威権者、義務者、権利者、産出者、賛成者、商業者、事業者、征服者、先登者、反対者、被害者、保証者、命令者、率先者、…
1887(明治 20)	徳富蘇峰 新日本之青年	異端者、学術者、管理者、起草者、偽善者、支配者、主権者、新聞記者、折衷論

		者、先覚者、専制者、先天派直覚論者、創業者、尊王論者、代表者、発起者、発議者、被治者、復古論者、弁護者、偏知論者、保護者、保管者、保険者、誘導者、論理哲学者、…
--	--	--

※用例欄には、“…”は用例の一部のみ挙げていることを示す。

因みに、調査の限りでは、明治期以前、洋学者による著書、翻訳書において、新概念を表すには、「者」を用いるより「人」を用いて表すことが多くみられる。福沢諭吉『西洋事情』（1867(慶応3)年)において、「者」が付く新語が見られない一方、「介抱人」「選挙人」「名代人」などの語が現れている。以下、用例の一部を引用する。

此撰挙人ヲ命ズルノ時節并ニ統領ヲ撰挙スル日ハ議事院ニテ之ヲ定ム。但シ、其日限ハ合衆國中同日タルベシ。(卷之二、二十八丁表、1867(慶応3)年)

下院ノ議事官ハ国民一般ヨリ撰挙シ、国民ノ名代人トシテ職ニ在ルコト二年ヲ限トス。(卷之二、十九丁表、1867(慶応3)年)

それに、鈴木^{ただかず}唯一^{い かん}『英政如何』²⁵ (1867(慶応3)年)では、漢語接尾辞「者」が付く語が「執心者」「案内者」のわずか数例しかないのに対して、「監案人」「支配人」「証拠人」「信仰人」「惣代人」「入札人」「名代人」など、「人」を用いた語が多く見られる。

4.6 総括と考察

本節は、辞書類・英語教科書類、洋学の先達者による著書や翻訳書を補充資料として追加しながら、新聞雑誌を中心に漢語接尾辞「者」の使用状況を考察した。その結果、漢語接尾辞「者」を用いて新しい概念を表すことは、明治期以前では漢語接尾辞「者」より「人」が多用される傾向があると見られ、漢語接尾辞「者」を用いた用例が少数であった。

しかし、明治期に入って使用例が増える傾向が見られる。特に、1886(明治19)年に、『将来之日本』『新日本之青年』の著者、且つ『国民之友』の創刊者である徳富蘇峰によって、「者」の使用が一種の流行と思われるほど、一般社会への浸透が深化したと考えられる。また、従来の研究で論じていなかった、1字漢語に下接する新しい語として「記者」「著者」のような語があることを明らかにした。

²⁵ 劉によれば『英政如何』では漢語接尾辞「者」が盛んに使われていたと述べている。しかし、実際のところ、接尾辞「者」が付く語は「執心者」「案内者」のわずか数例しかなかった。お代わりに「出板(版)する者」「出席する者」「発言する者」「編集たる者」「有罪の者」など、「～スル者」「～タル者」「～ノ者」の形が多く現れている。

このように、本稿の目的の(2)「者」はどのように展開され、普及したのかを、用例の観察に基づいて、一定の様子を明らかにした。

5. 中国語への影響

5.1 日本語の影響を受けた以前

語彙交流の面において、明治維新までは主に中国語から日本語への一方的な流入であったが、19世紀末から、20世紀初頭にかけての一時期——具体的に言えば、1895～1919の間——においては、日本語から中国語への語彙の大量の流入期である。中国語において、日本語の影響を受ける以前、欧米からの新しい概念を紹介するのに宣教師が大きな役割を果たした(沈(1989))。

宣教師による英華字典類の中、「者」を接尾辞として用いることが少なくない。以下、その項目の一部を示す(中国語の発音を表すもの、引用上省略する)。

COMPILER of books, 編修者.

DONOR, a bestower, 施与者; 恩主; 恩賜者; 賞賜者; 恩惠之人.

EXPERT scholar, 善学者; 師逸而功倍.

LAWGIVER, 設律者; 立法的.

LEADER, 倡率的人; 率領者; 首領; 表率; 指引者也; 引導的.

(Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language in Three Parts, Part III: English and Chinese* 『英華字典』、1822(道光2)年)

BUILDER, 承建者.

CONTROLLER, 管治者.

HORSEMAN, 善騎者.

LOOKER-ON, 傍觀者.

(Samuel Wells Williams²⁶ *An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect* 『英華韻府歷階』、1844(道光24)年)

AUTHOR, originator 開創者, 始造者; inventor, 新造者, 製作者, 首造者, 初造者; (後略)

GUIDE, 引路之人, 引導者; (後略)

HISTORIOGRAPHER, 記事者; (後略)

TUTELAR, 保護者.

²⁶ Samuel Wells Williams(サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ、1812～1884)はアメリカ人宣教師で、中国名は衛三畏である。

(Walter Henry Medhurst²⁷ *English and Chinese Dictionary* 『英華字典』、
1847～1848(道光 27～28)年)

Accusant, 原告者, 控告者.

Editor, a publisher, 作者, 出者; (後略)

Inventor, 作手, 制作者, 原造者, 始作之人.

Testifier, 証者, 作証者, 証人; (後略)

(Wilhelm Lobscheid²⁸ *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation* 『英華字典』、1866～1869(同治 5～8)年)

「者」を接尾辞として用いて翻訳したのは、上述した宣教師、または中国人によるものでもある。英語の学習書である『華英通語』において、道光版(1849(道光 29)年)には接尾辞「者」が現れず、咸豊版(1855(咸豊 5)年)には少数ながら、現れるようになった。以下、その項目を取り上げる。

Moneychanger 找銀者.

Shroff 看銀者.

Engineer 絞車者.

(『華英通語』「職分類」、1855(咸豊 5)年)

中国人によって編纂された最初の英華辞典である鄭其照の『字典集成』にも「者」の使用が見られる。以下、用例の一部を示す。

承賃者 Lessee

博学者 Learned man

買貨者 Buyer

同勞者 Fellow-labourer

(鄭其照『字典集成』「雜字」、1868(同治 7)年)

譚達軒による英語辞書と通称の学習書にも接尾辞と見られる「者」の項目も少なくない。以下のように、引用する。

Adjute, to help, 幫助, 輔助, 扶助, 輔佐.

Adjutor, a helper, 扶助者, 輔助者.

Discover, to find out; to disclose, 洩出, 露出, 顯出, 表出, 尋出, 搜出.

Discoverer, one who sidcovers. 看出者, 睇出者, 尋出者.

²⁷ Walter Henry Medhurst(ウォルター・ヘンリー・メドハースト、1796～1857)はイギリス人宣教師で、中国名は麦都思である。

²⁸ Wilhelm Lobscheid(ヴィルヘルム・ロブシャイト、1822～1893)はドイツ人宣教師で、中国名は羅存徳である。

Edit, to prepare for publication, 撰, 作出, 著作, 校訂, 撰新報.

Editor, one who prepares for publication, 作者, 撰者, 校訂者, 主筆, 新報主筆.

Invention, act of finding out; that which is invented, 始創, 始初尋出新法.

Inventor, one who finds out or contrives, 始初尋出新法者, 始創之人.

Translate, to render into another language, 翻譯.

Translator, one who translates, 翻譯者.

Write, to form letters and words with a pen or style; to engrave; to compose, 繕写, 彫刻, 作文, 撰作, 著作.

Writer, one who writes; an author, 繕写者, 書吏, 書辦.

(譚達軒『華英字典彙集』、1875(光緒 1)年)

文士類 Abbreviator, 写減筆者.

Chronologist, 作史者.

Commentator, 作註者.

Geographer, 考地理誌者.

工匠類 Worker, 做工者.

商売類 Auctioneer, 投貨者.

人類 Chemist, 製薬人、精化学者.

Editor, 作文者、主筆.

Predictor, 預言者.

Prosecutor, 控告者.

Protector, 保護者.

僧尼類 Cenobite, 修道者.

(譚達軒『通商指南』、1875(光緒 1)年)

5.2 日本語による影響

1902(光緒 28)年に、中国湖南出身の知識人・留学生は『遊学訳編』という雑誌を発行した。本雑誌は日本や欧米の政治、経済、教育等を紹介しており、留日学生と同郷会が主体となって発刊した雑誌の中でも最も初期のもので、学術的性格が強い雑誌である。

本雑誌において、「者」という字が多く見られるが、「ヒト」を表す接尾辞より、文法的な機能としてのものが大半である。以下に例文を取り上げる(括弧内には、筆者による解釈で、「者」が構成した語の意味を示すのに必要な最小程度の日本語部分訳を添える、以後同様である)。

夫法蘭西社会革命者実一切社会革命之母也。(法蘭西社会革命とは、確実に全ての社会革命の母なり。)

(「紀十八世紀末法国之乱」『遊学訳編』第4冊)

柏拉圖既以国家之政治随人民之品性而變更。又以為政治者世界最高等之芸術也。(プラトンは国家の政治は人民の品性によって変えると思っている。又は、政治というのは世界最高級の芸術であると思っている。)

(「政治学説(続第4冊)」『遊学訳編』第5冊)

抛個人的立脚点觀之，自殺者為人之自由，其勇氣亦足称矣。(個人的な立場から見れば、自殺という行為は人の自由で、その人の勇氣にも感心すべきだろう。)

(「国民教育論」『遊学訳編』第5冊)

教育者国民製造之材料，家庭者社会生活之根基。(教育とは国民を教養する素材で、家庭とは社会生活の基礎だ。)

(「論学校対家庭与社会之關係(訳日本中島半次郎教育学講義)」『遊学訳編』第8冊)

しかしながら、『遊学訳編』においては「天文学者」「保護者」「多数者」「哲学者」「少数者」のように、「ヒト」を表す接尾辞としての「者」の用例もある。以下、用例を示す。

至于火星之中亦有種々發見，雖其事实尚未知其尽確与否，然知名之天文学者久唱道之，信如其說。(有名な天文学者が頻繁に唱えて、)(「十九世紀學術史(続前)」『遊学訳編』第2冊)
義務教育以強制就学責令兒童之保護者(即父母)依国家之命令(即督責規則之類)不任己意之自由為本質，故於国家有直接之關係，而不僅間接以干涉之已也。(義務教育は強制就学をもつて、子供の保護者(即ち両親)に国家の命令に従うことを命令し、)

(「学校行政法論(続第2冊)」『遊学訳編』第3冊)

紀元前四百三十一年，雅典三大政治家披里格列臨戰死者之葬，演說民主政治之利益。曰：吾人之民主政，吾已認其見于事实，以吾人之政嘗在多数者之手，而不在少数也。(政治は既に我々多数者の手にあり、)

(「政治学説(続第4冊)」『遊学訳編』第5冊)

人生而為大英雄、為大政治家、為大哲学者、為大詩人、為大發明家，半由教育，半賴天資。

(大いなる哲学者になり、)

(「国民教育論(国民新聞)」『遊学訳編』第5冊)

富也者少数者所独有也，自由也者多数者所享有也。故少数者之要求政權也以富，多数者之要求政權也以自由而其主權。(富裕は少数者に独有されるもので、自由は多数者に享有されるものだ。故に少数者は富裕になるために政權を求め、多数者は自由を主權として政權を求める。)

(「政治学説」『遊学訳編』第7冊)

1903(光緒 29)年に浙江省出身の留学生同士によって発行された『浙江潮』という雑誌においても、『遊学訳編』と同じように、文法的な機能としての「者」が多く見られる一方、「愛国者」「記者」「教育者」「所有者」「出身者」「卒業生」「哲学者」「労働者」などの用例も見られる。

以下、用例の一部を取り上げる。

吾若聞愛國者之言,其言曰:吾不自知其何從,吾不自知其何從,惟吾祖国能使我歌、能使我悲、能使我泣,吾不知彼何以具此一種魔力,能移我若是之甚也。(私は愛國者の話聞いたら、)
(「国魂篇」『浙江潮』第1期)

此等租借地之法律關係,詳説甚難。若論私法,上之貸借權及用益權。本不妨所有者之權利,但今所謂租借地者豈得同日而語耶。(元々所有者の權利を侵害しないが、)

(英峯「叙徳俄英法条約所載「高權」及「管轄權」之評論 因及「舟山条約」之感慨」『浙江潮』第2期)

上所述者氣質之關係于年齡者也,然于個人則又生種種變化。教育者又不可不加意者也。

(教育者は又は注意しなければならないのだ。)(不懣子「教育学(続第2期)」『浙江潮』第3期)

然議會主權仍少数人操之,久之久之勢必復流於專制。故報館記者常注意乎。(故に、新聞社の記者はよく注意する。)(築髓「論歐美報章之勢力及其組織」『浙江潮』第4期)

(前略)自物競自存之説興,于是種類盛衰興亡,之故明進化論者實民族主義之原泉也。(故に進化論者は實は民族主義の元であることが分かった。)

(余一「民族主義論(続第2期)」『浙江潮』第5期)

邇者留学界上漸漸知提倡工業主義。以某所知、茲方習普通學、而將來之希望採鋤者、鐵道者、造兵學者、火藥學者、建築學者,已不乏人。(しかし、將來の希望である採鋤者、鐵道者、造兵學者、火藥學者、建築學者は、人が足りないということはもうない。)

(「敬上郷先生請令子弟出洋遊學並籌集公款派遣學生書」『浙江潮』第7期)
今之言維新者,其自立名義,以号召天下。(今、維新者を言えば、)

(願雲「論説 四客政論」『浙江潮』第7期)

医之有衛生治療術將以保身體之康寧而消弭其苦痛也。社會主義者將以增人間之福祉而消除其厄難也。(社會主義者は人間の福祉を増加させることによって厄難を消すことにする。)

(大我「新社會之理論」『浙江潮』第8期)

至一八七五年而紐約遂有靈智協會之設矣。今其支會印度百七十、美洲九十、歐洲七十,其目的皆欲播泰東之文物,註神秘之智慧,以擊唯物論者也。(唯物論者に衝撃を与えるためののだ。)

(先朕「十九世紀時歐西之泰東思想」『浙江潮』第9期)

中国においては、1872(同治11)年に創刊された日刊紙『申報』²⁹を通じて考察してみた。

²⁹ 『申報』はイギリス人貿易商アーネスト・メジャー(Ernest Major、安納斯脱・美查)によって創刊されており、強い影響力をもっていた新聞である。

「記者」を例として取り上げよう。その結果、1語と見られる「記者」の語は1893(光緒19)年に日本と関わる記事の中で初めて現れるようになった。その後の数年間も用例数が少ない上に、日本と関わる記事に限られた。以下用例を示す。

翌日東京各日報社記者又宴於芝山紅葉館。(翌日、東京各日報社の記者は又芝山紅葉館で宴会を開く。)

(「公讌志盛」『申報』1893(光緒19)年7月28日)

前日江口氏已偕日日新聞社記者川村氏,航海至申聞日內須偕彼国官商二十余人取道赴蘇与三觀察熟籌一切云。(前日、江口氏は日日新聞社記者の川村氏を連れて、)

(「開埠紀聞」『申報』1895(光緒21)年10月16日)

日本明治生命保険会社所延医学博士中浜東一郎在高麗仁川埠創為大日本私立衛生会社。某日由日本官民延至公立小学校内演說衛生秘要,在座傍聽者為代理公使加藤氏及各校各新聞社記者韓國官紳亦与焉。(在席の傍聽者は代理公使加藤氏、及び各校各新聞社の記者、韓國官紳も同席している。)

(「蓬壺日影」『申報』1896(光緒22)年10月30日)

『申報』によって、「記者」のほか、「科学者」「建築学者」「進化論者」「代表者」「発言者」「反对者」「哲学者」「唯物論者」などの語の使用は、全て20世紀になってからのことである。

5.3 総括と考察

以上、従来の研究で考察されていなかった、日本語の影響を受ける前の中国人による「者」の使用状況を考察してみた。結果、それ以前にも中国人が既に「者」を接尾辞として用いたことが分かった。

しかし、従来の先行研究によれば、現代中国語において、日本語との同形語と見られる「革命者」「哲学者」「消費者」「唯物論者」は、やはり日本語からの影響であると考えられる。

本稿は『遊学訳編』『浙江潮』を通じて、当時の在日留学生による「者」の使用状況を考察してみた。その結果、当時の留学生は日本語を通じて近代的な文化を吸収しているうちに、日本語における「者」が構成した、近代的な概念を表す語彙もそのまま用いたことがあると分かった。また、本稿は『申報』を利用し、特定の「者」の使用状況の分析を試みた。

このように、本稿の目的の(3)日本語の「者」の使用は中国語に影響を与えたことを確かめることができた。

6. おわりに

本稿では、日本語における「ヒト」を表す漢語接尾辞「者」の展開過程について、特に翻訳での「者」の多用に注目して、蘭和辞書や英和辞書などの辞書類による記述、翻訳書や新聞雑誌などの出版物による用例に基づいて考察を行った。その結果を、研究目的を提起しながら簡潔に述べる。以下の通りである。

第1に、幕末・明治初期において、日本人が英語を翻訳する際に、なぜ「者」を接尾辞として多用にしたのか。

それは、日本人が最初に英和辞典を編纂する際に、英蘭辞書を活かして、従来の蘭和辞典を媒介として、“英語—蘭語—日本語”の順に翻訳するため、蘭和辞書における「者」をそのまま用いたことが多くあった。そのため、従来の研究による“中国の洋学資料からの影響が大きい”という説は不適切である。実際のところ、英語翻訳での「者」の多用は日本の蘭学からの影響が大きかった。

第2に、翻訳で「者」が登場してから、どのように一般化したのか。

辞書類において「者」が多く用いられた一方、一般出版物では「者」の使用はしばらく少なかった状況であった。明治期に入って、一般庶民の英語を学ぶ熱意、知識人の西洋先進文化を吸収するという意志によって、英語教科書から西洋の学問を紹介する書籍や新聞雑誌まで、多く出版されるようになった。この背景において、明治初期から「者」の使用が増え続けた。

特に、明治20年代になると、「者」の使用は急速に増えるようになった。西洋による近代的な文化から激しい刺激を受けて、日本社会において、様々な論説やが起こった。これに伴って、「者」を用いた「～論+者」のような語も一時的に多くなった。

このように、「者」で表す新語を創出する過程の中、新しい概念を表す語と「者」の語をくっつけることで新語を作るという語の作り方、「者」は主に2字、または2字以上の漢語と結びつくが、その中で、「記者」「著者」のような「1字+者」の語もあることに注目すべきである。

第3に、中国語への影響について、その使用状況を考察してみる。

本稿は、それぞれ宣教師と中国人が編纂した英華字典類における「者」の用例を調べて見たところ、「者」を用いた使用例の中、文法的な機能と見られるものもあれば、「ヒト」を表す接尾辞と見られるものもある。このことから、日本語の影響を受ける前に、翻訳上では、中国宣教師、または中国人による「者」の使用が既にあったことが分かった。

しかし、在日中国人留学生・知識人が刊行した新聞雑誌における「者」の用例を観察してみたところ、現在中国語においても使われている「唯物論者」「哲学者」のような、近代的

な新概念を表す語は、在日中国人留学生・知識人が日本語から借用した可能性が極めて大きいと見られる。

日本語から中国語への影響について、本稿は用例の収集までにとどまった。日本語の影響を受ける前に、中国語における既に「者」を用いたことから、偶然に日本語と一致する翻訳語を造った可能性もあり得るため、日本語からの影響はどの程度であったのか、まだ不明な点があつて、それを今後の課題としたい。

参考文献

- 石井正彦(2014)「“臨時一語”の研究と教育—文章とのかかわりを中心に—」『高知大学留学生教育』8:13-42.
- 王力(1944)『中国語法理論』中国重慶:商務印書館, pp. 302-305.
- 朱京偉(2003)『近代日中新語の創出と交流:人文科学と自然科学の専門語を中心に』東京:白帝社.
- 沈国威(1994)『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』東京:笠間書院.
- 杉村博文(1986)「特集・接辞—～者 ～家」『日本語学』05-03:92-96.
- 杉本つとむ(1999)『杉本つとむ著作選集 7 辞書・事典の研究Ⅱ』「第九章 『英和对訳袖珍辞書』の研究」東京:八坂書房.
- 曾睿(2012)「接辞性字音語基の造語力—「者」「家」「人」を対象として—」『言語科学論集』16:39-49, 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻編.
- 陳生保(2005)『中国と日本:言葉・文学・文化』千葉:麗澤大学出版会.
- 豊田実(1941)『日本英学史の研究』東京:岩波書店.
- 永嶋大典(1968)「英語辞書の発達—英和辞書」日本の英学—〇〇年編集部編『日本の英学—〇〇年 明治篇』東京:研究社, pp. 288-304.
- 北京師範学院中文系漢語教研組編著(1959)『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』中国北京:商務印書館, pp. 106-115.
- 森岡健二(1965)「訳語形成期におけるロブシャイド英華字典の影響」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』19:61-102.
- 森岡健二・伊藤みゑ子(1966)「訳語形成期におけるロブシャイド英華字典の影響Ⅱ」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』21:113-159.
- 森田武編(1989)『邦訳 日葡辞書索引』東京:岩波書店.
- 李秀卿(2000)「『和英語林集成』に見られる「ひと」を表す漢語系接辞—「英和の部」における増補様相—」『日本研究』27:223-241, 韓国外国語大学校日本研究所.

李慈鎬(2005)『増補訂正英和字彙』における造語成分「者」『早稲田日本語研究』14:37-48, 早稲田大学日本語学会.

劉凡夫(1989)「近代漢語系接尾辞「～者」の展開—幕末・明治初期を中心に—」『国語学研究』29:11-19, 東北大学文学部.

——(2009)「近代漢語系接尾辞「～者」の展開—中日間の語彙交渉を中心に—」『以漢字為媒介の新詞伝播—近代中日間詞彙交流的研究』中国遼寧:遼寧師範大学, pp. 321-365.

調査資料

『日葡辞書(VOCABULARIO DA LINGUA DE IAPAM)』(1603-1604) 土井忠生解題 [参照は Oxford 大学 Bodleian Library 所蔵の長崎版による(岩波書店, 1960 年編集).]

『諸厄利亜語林大成』草稿(1814)十五卷四冊, 本木正栄ほか編 [参照は日本英学史料刊行会編集の複製本による(大修館書店, 1982 年編集).]

『和蘭字彙』(1855)五冊, 桂川甫周ほか編 [参照は早稲田大学古典籍総合データベースで公開されている加藤蔵書版による。]

『英和对訳袖珍辞書』(1862)堀達之助ほか編 [参照は立教大学デジタルライブラリーで公開されている版による。]

『西国立志編』(1871)八冊, Samuel Smiles 著, 中村正直訳 [参照は早稲田大学古典籍総合データベースで公開されている江川町(静岡)本屋市蔵書版による。]

『東洋学芸雑誌』(1881-1888)第 1-87 号, 東洋学芸社編 [参照は国立国語研究所の雑誌データベースで公開されている資料による。]

『申報』(1872-1949) Ernest Major 編 [愛如生《申報》数拠庫で公開されている資料による。]

『遊学訳編』(1902)第 1-12 冊, 遊学訳編総社編 [羅家倫主編の資料による(台北:中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会, 1969 年編集).]

『浙江潮』(1903)第 1-10 期, 浙江同郷会幹事編, 東京:浙江同郷会雑誌部.

A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages.(1857) 第 2 版, H.Picard 著 [参照はオランダ文学デジタルライブラリー(DBNL)で公開されている資料による。]

Self-Help. (1968) Samuel Smiles 著, London: Sphere.